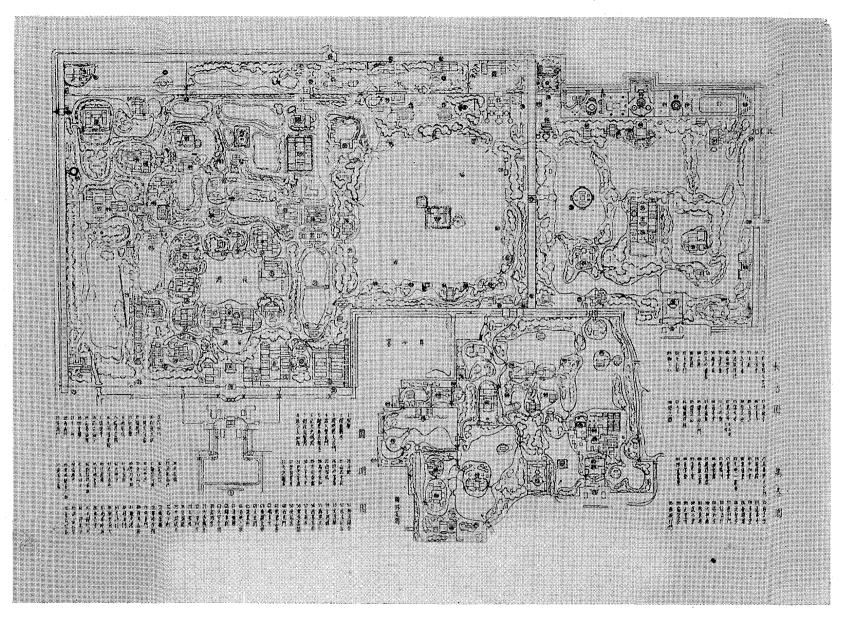
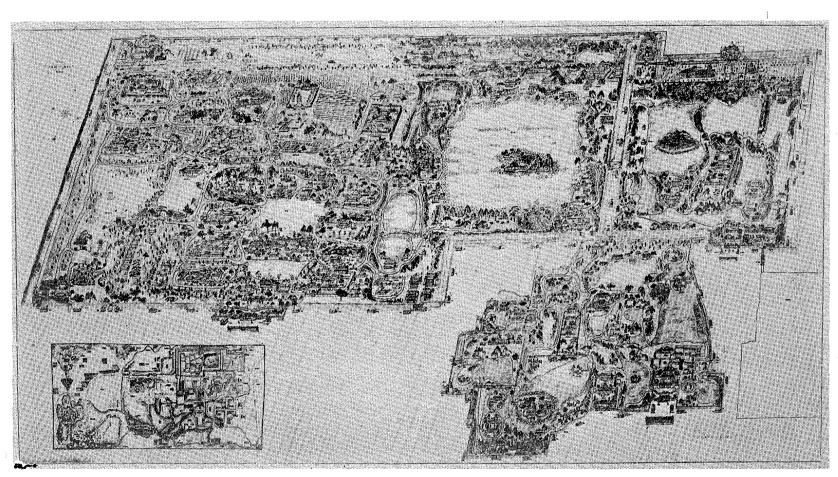
Title	圓明園の研究
Sub Title	Une etude sur le palais "Yuen-ming-yuen" (圓明園) de l'empereur K'ien-long (乾隆)
Author	後藤, 末雄(Goto, Sueo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1959
Jtitle	史学 Vol.32, No.3 (1959. 11) ,p.1a(245a)- 54(298)
JaLC DOI	
Abstract	L'empereur K'ien-long n'admettait personne a entrer dans son magnifique palais Yuen-ming-yuen, sauf ses favorites. C'est pourquoi les documents historiques concernant ce palais manquent du cote chinois; on n'a comme documents que les deux prefaces mises en tete du recueil des poesies de cet empereur. On en trouve cependant de tres precieux chez les missionnaires jesuites francais qui travaillaient a la cour comme astronomes, horlogers, et artistes. Ils etaient appeles par le gout de l'empereur pour les choses europeennes, malgre l'interdiction de la foi chretienne dans le pays. Pour repondre a ce gout, la Compagnie de Jesus en France envoya aupres de l'empereur des missionnaires formes d'avance dans ce but. En fait, ce sont eux qui dresserent les cartes geographiques de tout l'empire chinois, presenterent des telescopes a l'empereur firent des experience de la machine pneumatique en sa presence et dresserent toutes sortes de tableaux. L'un d'eux fit installer des jets d'eau devant la premieres maisons europeennes construites dans le jardin du palais "Yuen-ming-yuen". Ces missionnaires francais racontaient a leurs superieurs ou a leurs amis tout ce qu'ils avaient fait et vu a Pekin. Leurs lettres out ete publiees dans le celebre recueil des "Lettres edifiantes et curieuses". L'empereur K'ien-long etait tres satisfait de ces missionnaires qui lui rendaient des services si remarquables, mais il ne revoqua jamais l'edit interdisant le christianisme. Helas ! en 1860, le palais "Yuen-ming-yuen" qu'on appelait le Versailles de l'Orient fut reduit en cendres, par l'armee anglofrancaise qui y avait mis le feu! Selon le prof. Goto, ce manifique palais n'appartenait a la Chine, mais au monde entier. C'est done un grand crime contre l'humanite que la destruction de ce palais chinois. On a par consequent le droit de blamer le vandalisme de cette armee. Mais a cette epoque, l'imperialisme etait un principe des grands Etats, et la conquete etait une gloire des rois. On aurait done tort de blamer l'esprit de cette epoque au no
Notes	口絵:圓明園全圖, 海晏堂西面の噴水, 大水法正面
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19591100-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

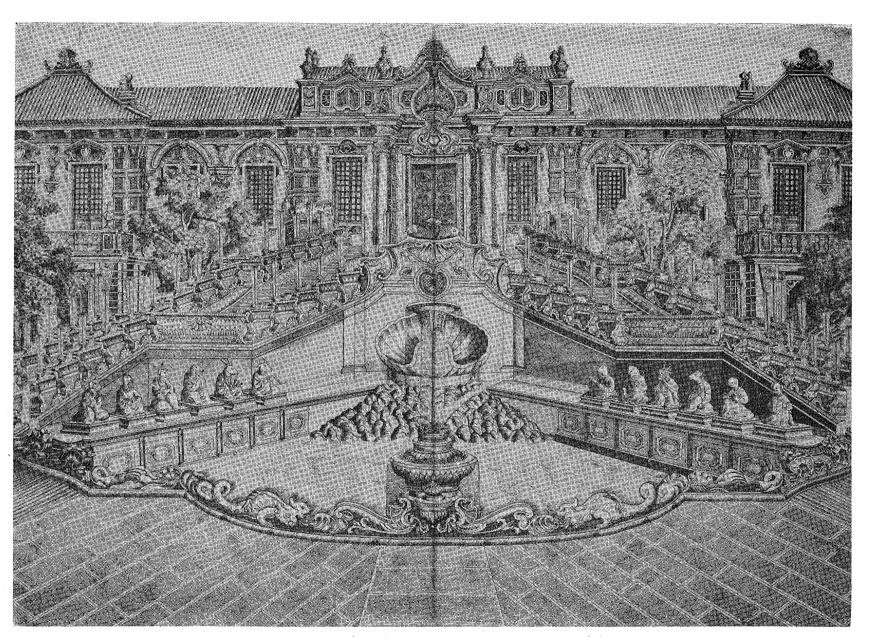
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



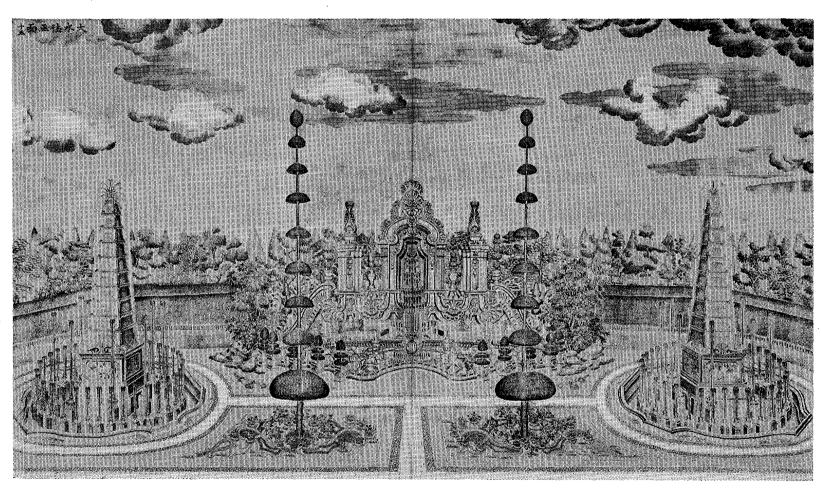
圓明園全圖 (モーリス・アダム「圓明園」より)



同 上 モーリス・アダム「圓明園」より



海晏堂西面の噴水(モーリス・アダム(圓明園)より)



大水法正面 (モーリス・アダム(圓明園)より)

#### 圓 明 園

究

目 次

 $(\Pi)(\Pi)(\Pi)(\Pi)(\Pi)(\Pi)$ 圓明園の名稱と增築工事の完成

圓明園に關するアッチレの記述 圓明園の風光と御製詩及び「四十景詩」

圓明園に西洋樓と噴水の築造

圓明園の掠奪と燒毀

結 語

(I) 圓 明 園 の 名 稱

載されている通り、 圓 明園は北京の西直門外、 康凞帝は此の地域に暢春園を構築し、 皇城の西北にあたり、 皇城から約二公里の地に位していた。 陽春盛夏の候、 屢
と
こ
の
新
園
に
行
幸
さ
れ
た
。
そ
し
て
帝
の
崩
御 雍正帝の「圓明園前記」に記

されたのは、この暢春園に於いてであった。

康凞帝は生前、 和碩雍親王 (雍正帝)の爲に圓明園を新築し、 園名をも賜つたのである。 雍正帝の「前記」には左の

句 がある。

圓 眀 闎 の 研 毠

後

藤

末

雄

(三四五)

「朕、扈蹕するを以って、拜して一區を賜ふ。……園旣に成る。慈恩を仰荷し、錫ふに園額を以つてし、圓明と曰ふ」。

なお圓明の語義に就いては「前記」に、

圓明の德を體得するに、それ圓にして、神に入るは君子の時に中れるなり。明にして普く照らすは、達人の 睿智 な 「嘉名の錫、 圓明を以つてするが若きに至っては、意旨深遠にして、殊に未だ窺ひ易からず。嘗って古籍の言を稽へ、

り。」とあるし、乾隆帝の「圓明園後記」には、 「宇物を周りて圓明なり。圓明の義、蓋し君子の時に中れるなり。皇祖、是名を以って皇考に賜ふ。」とある。

然らば「君子の時中」とは如何なる意味か。「時中」といふ言葉は「中庸」に出ている。

憚なきなり。) 子は中庸す。小人は中庸に反す。君子の中庸や、君子にして時に中れるなり。小人の中庸に反するや。小人にして忌 「仲尼曰。君子中庸。小人反中庸。君子之中庸也。君子而時中。小人之反中庸也。小人而無忌憚也。 (仲尼日く、君

朱熹は此の一句に次ぎの如き注釋を加えている。

て、而して又、よく時に隨って中に処するを以ってなり。」 「君子之所以爲中庸者。以其有君子之德。而又能隨時以処中也(君子の中庸をなす所以のものは、その君子の德あり

意味を解注されている。ついで乾隆帝は「宇物を周りて圓明なり」と言われ、君子の言動が悉く自然法則に適順して、 前記 雍正帝が「嘗って古籍の言を稽へ………」と「前記」の中で言はれているが、この古籍とは「中庸」を指すに違いな 「時に中る」とは蓋し、 の中で、 「夫れ圓にして、神に入るは君子の時に中れるなり。明にして普く照すは達人の睿智なり」と圓明の 君子の行動が常に中庸を得て、自然の理法に適合することを言うのである。 故に 雍正帝は

事の宜しきに隨うべきことを主張されている。

が、 des 深遠であるから、 は de は、 くヨ 術 0 (Combaz, 当らない。 が 道德的真義を理解することが出來ない、その意義を譯出しようと試みても、その譯語は徒らに冗漫に陷って、 感を表現することができない。 同音なるが故に、 办 Jardin de la clarté ペリオ博士は何かの誤植ではないかと言つている。そしてペリオ教授自身は Jardin de la clarté くの 圓明の眞義が理解されていない。ペリオ教授は「通報」(T'oung-pao, 1921, p. 226) jardins) 1 口 prudence 如く圓明園といふ名稱には重大な道德的意義が含まれている。 ッパに紹介したフランス宣教師アッチレは、その書信 ファヴィエ師は、 Les palais impériaux de la Chine) の中で、圓明園を Jardin de もしくは「天下第一の名園」(Jardin par excellence)と譯出しているが、殘念ながら此の これを字義通り、 et アッチレ師は在支五年にも拘らず、 de ronde la その名著「北京」(Favier, Péking, 1897, 2 vol.)の中で、「愼重と明晢の庭園 clarté)と譯して、園名を道德的に解釋している。またコンバは其の著「支那の宮殿」 と遂語體に譯している。この方が稍、原意に近い。 なぜなら漢字は象形文字であり、 外國語に譯しても絕對に其の本義は表現されない。 圓と園との意味を混同したのだと非難しているが、この非難も (後章参照) 常に藝術的 それにも拘らず、 の中で、圓明園を「名園中の名園」 印象を伴うからである。 la clarté blonde 前述の通り、 ましてやその由 圓明園の結構と宏麗とを逸早 の中で、 圓明の 圓 明 來を捉えて、 parfaite, と譯している 語 園 義は極 の圓と 異 (Jardin 敎 また藝 僧 遠 め 其 7

ら見ても、 後記」 要するにアッチレにしろ、 を一讀してゐない。 親しく 原典を讀むことは極めて困難だったであらう。 西洋人のことで、 コンバにしろ「御製圓明園詩」 何分、 遠隔の地にあるし、 の
差頭に
掲げられた
雍正帝の 現に世界第一の支那學者として自他共に許しているペ 訪書の便も缺けているし、 「圓明園前 記 殊に言語 及び乾 0 相 帝

圓明園の研究

史

記」と乾隆帝の「後記」との二序があることを知らずして、「乾隆帝の二序あり」と速斷していることは、 リオ博士すら「予は此の詩集を所持すれども、 目下、予の自由に任かせず」と斷わっている。 その結果、 雍正帝の ペリオ教授 前

ことができるから、 とにかく「前記」と「後記」とを併讀すれば、園名の由來をはじめ、 左に兩記を轉載することにしよう。 諸般の事情が解るし、また圓明園の景觀を知る

の為めに惜しまざるを得ない。

# 世宗憲皇帝御製圓明園記

賜園也。在昔 朕藩邸所居 圓明園在暢春園之北。 檻花堤樹。不灌漑而 取天然之趣。省工役之煩。 渟 泓 。 賜一區。林皋淸淑。波淀 春園。 **熈春盛暑**。 時臨幸 戚廢野。鄭縮其址。築暢 **疾。飲泉水而甘。爰就明** 餘暇。遊憩於丹陵沜之 皇考聖祖仁帝聽政 相度地宜。構結亭榭。 朕以扈蹕。拜 因高就深。傍山依 朕が藩邸にして居る所の 泉の水を飲めば甘しとして、爰に就ち 賜園なり。在昔、 圓明園は暢春園の北にあり。 渟泓、高きにより、深きに就き、山に傍ひ 股、<br />
扈蹕するを以って<br />
拜して、 暢春園を築けり。熈春盛暑、時に臨幸されき。 廢野き明戚し、その址を鄭縮して、 餘暇、丹陵沜の涘に遊憩され。 皇考聖祖仁皇帝、聽政の **檻花堤樹、灌漑せずして、しかも** 天然の趣を取って工役の煩を省く。 水に依り、地宜、相度り、亭榭を構結し、 區を賜ふ。林皋清淑、波淀

<sup>′</sup> 也。土壤豐嘉。百彙易以 **園旣成。仰荷** 蕃昌。宅居於兹安吉也。 而自集。蓋以其地形爽

滋榮。巢鳥池魚。樂飛潛

慈恩。錫以園額。日圓明。

**鑾**輿。 欣承

日之誠。花木林泉。咸增

夜孜孜。齋居治事。雖炎

禮告成。百務具擧。宜寧 計。時踰三載。僉謂大

土清佳。惟園居爲勝。始 神受福。少屛煩喧。而風 命所司。酌量修葺。亭臺

邸壑。悉仍舊觀。 軒墀。分列朝署。俾侍直 惟建設

諸臣。有視事之所。構殿 於圓之南鄉。 以聽政。晨

页

0)

股 嘗 恭 迓

色笈。慶天倫之樂。申愛

暑欝蒸。不爲避暑迎凉之 榮寵。及朕纉承大統。夙

園旣に成る。<br />
慈恩を仰荷し おのづから集る。蓋し其の地形の爽場、 茲に宅居するは安吉なるを以ってなり。 土壤の豐嘉なるを以って、百彙藩昌し易く、 滋榮す。巣鳥池魚、飛潛を樂んで

朕、嘗って恭しく**鑾輿を**迓へ、 錫ふに園額を以ってし、圓明と曰ふ。

欣んで色笈を承け、

愛日の誠を申さぬ。花木林泉、 天倫の樂しみを慶び、

咸、榮籠を増す。朕大統を鑚承するに及び、 夙夜、孜孜、齋居して事を治む。

の計をなさず。時、三載を踰ゆ。僉謂ふ。 大禮成るを告げ、「百務具さに擧がる。 炎暑欝蒸なりと雖、避暑迎凉

宜しく神を等んじ福を受け、少しく煩喧を屛くべし。 而して風土清佳だだ園居するを勝となすと。

亭臺邸壑は悉く舊觀による。 始めて所司に命じて、修葺を酌量せしめ、

園の南郷に構へ、以って政を聽く。 侍直の諸臣をして事を視るの所あらしむ。殿を ただ軒墀を建設し、朝署を分列し、

〜 三 四 九)

五.

六

平原膴膴。嘉頻穰々。偶 中或闢田廬。或營蔬圃。 相接見之時爲多。園之 咨詢。頻移書漏。與諸臣 曦初麗。夏晷方長。召對 睡覽。則遐思區夏。普 一たび睡覽すれば遐かに區夏を思ひ、平原膴膴、嘉頻穰穰、偶 相接見するの時、多きを爲す、園の中に 召對咨詢、頻にして書漏を移し、諸臣と 或に田廬を闢き、或は蔬圃を營む。 **晨曦初めて麗しく、夏晷方さに長し。** 

良苗の候に應ずることを冀ふ。 陌に臨んで雲を占するが若きに至っては好雨の時を知るを望み、 普く秋を有るを配す。欄に憑って稼を觀

**祝有秋。至若憑欄觀稼。** 

臨陷占雲。望好雨之知

その景象恍然として苑囿の間にあるなり。 則ち農天の勸瘁、穡事の艱難、

夫勸瘁。 穡事艱難。 其景 時、冀良苗之。應候則農

象又恍然在苑囿間也。

若乃林光晴霽。池影澄淸。 淨波動かず、遙峰、鏡に入り、 もし乃ち林光晴霽、池影澄淸、

道妙自から生じ、天懷預朗ならば

妙自生。天懷頊朗。乘機

朝暉夕月。映碧涵虛。道

淨練不波。遙峰入鏡。

素甓版犀。不斷不析。不 その采椽括柱、素甓版扉、斷たず、析らず 聖範の昭埀によるなり。地に隨つて 凡そ兹に起居の節あるは、悉く 恪遵し、敢へて輁を越ゆることなし。

聖範之昭埀。隨地恪遵。

凡茲起居之有節。悉由

情。拈韵揮毫。用資典學。 務之少暇。研經史以陶

罔敢越輁。其釆椽括柱

丹艧を施さざるは則ち皇考

施丹艧。則法

朝暉夕月、映碧、虚を涵し

以って情を陶し、韵を拈り、豪を揮ひ、もって典學に資す。 機務の少暇に乗じ、經史を研め、

觀射於圃。燕間齋肅。動僚。宵坡章奏。校文於墀。皇考之節儉也。畫接臣

作有恒。則法

臣。從容遊賞。濟以舟楫。花凝湛露。偶召諸王大日。景物芳鮮。禽奏和聲。且考之勤勞也。春秋佳

錫。以園明意旨深遠。殊育物也。至若嘉名之皇考之親賢禮下。對時

曠。此則法

適宜。萬象畢呈。心神怡寫暢洽。仰觀俯祭。遊泳

餉以果蔬。一體宣情。抒

入神君子之時中也。明體認圓明之德。夫圓而未易窺。嘗稽古籍之言。

**勗身心。虔體** 若擧斯義以銘戶牖。以 而普照達人之叡知也。

天意。永懷

圓

園の

射を圃に觀、燕間齋肅にして、宵に章奏を坡き、文を墀に校し、の節儉に法るなり。晝は臣僚に接し、

勤祭に法るなり。春秋佳日動作恒あるは則ち皇考の

景物芳鮮、禽は和聲を奏し、

召し、從容として遊賞す。濟すに舟楫を以ってし、花は湛露を凝らす。偶、諸王大臣を

**抒寫暢合す。仰觀俯察して、遊泳** 銄ふに果蔬を以ってす。一體情を宣べ

宜しきに適ふ。萬象畢く呈し、心神

怡曠するは、これ則ち 国しまが近え、『参髻、『し

物を育るに法るなり。嘉名の錫、皇考の賢に親しみ、下を禮し、時に對して、

殊に未だ窺ひ易からず。嘗って古籍の言を稽へ、圓明を以ってするが若きに至っては、意旨深遠にして、

**単に、うはまご)ますで)。** 圓明の徳を體得するに、夫れ圓にして、

明にして普く照らすは達人の叡知なり。神に入るは君子の時中なり。

以って身心の、以って戸牖に銘し、

天意を虔體し、

(三五一)

七

八

以上答 之寧謐。不圖自逸。而冀 和。不求自安。而期萬方 聖誨。含照品彙。長養元 春臺人。遊樂園廓鴻基。 百族之恬熈。庶幾世躋 品彙を含照して長く元和を養はん。 以って上 世に春臺に躋る人、園廓の鴻基に遊樂せんことを庶幾ふ。 自ら逸しむを圖らずして、百族の恬熈を冀ふ。 目から安ずるを求めずして、萬方の寧謐を期し。 永く聖誨を懷ふに勗めなば

それ爱に予が懷を宣示して、 これが記をつくる。 而して朕の心ここに至って少しく慰むべきなり。 皇考埀祐の深恩に答へん。

之心。至是或可以少慰 也。夫爰宣示予懷。而爲

皇考埀祐之深恩。而朕

仰ぎ惟るに 而して後人に貽訓するの意、 皇考これがために

皇考爲是記述

仰惟

皇祖名園本義以自儆。

尤も深切著明なり。予、小子

園中の諸什に刻して、

德言。 夙夜問斁。 今刻闌

子紹衣

尤深切著明。予小 而貽訓後人之意。

斯文。辨之首簡、 中諸什。敬錄 庶一開

提誨。用志堂構之思云。

これが首簡に辨ず。

皇祖名園の本義を記述し以って自から儆め、

徳言を紹衣し、夙夜斁るなし。

斯の文を敬録し、

もつて堂構の思ひをしるすといふ。 たび卷を開けは提誨に親しむが如きを庶ひ、

昔我

皇祖之賜園終而茸之。略 具朝署之規。以乘時

干斯。我

皇祖之先憂後樂。周宇物

而

圓

霐 0 豣

究

皇考。因

皇考之先憂後樂。

淑情也。或怡悅干斯。 道自生也。細旃廣夏。 風水月入襟懷。而妙 蔬園。量雨較晴也。松 或歌詠干斯。或惕息 時接儒臣研經史以 華。尚其朴。不稱其富。 墀亭榭。凸山凹地之 也。騐農桑則有田盧 灌木叢花。怒生笑迎 稱其幽。樂蕃植則有 紛列於後者。不尙其 行令布政親賢。而軒

昔、我が

而して軒墀亭榭、凸山凹池の 令を行ひ、政を布き、賢に親しめり。 ほぼ朝署の規を具ふ。以って時に乘じて、 皇祖の賜園により、修めて之れを茸き、

その幽を稱す。蕃植を樂めば則ち その朴を尙び、その富を稱せずして、

後ろに紛列するは、その華を尙ばずして、

灌木叢花の怒生して笑迎するあり。 農桑を聡ずれば田盧

松風清月襟懷に入りて、 蔬園の雨を量り、晴を較するあり。

妙道目から生ず。細旃廣夏

以って情を淑ぐ。或は斯に怡悅し、時に儒臣に接して經史を研め、

或は斯に歌詠し、或は

皇考の先憂後樂は 斯に惕息す。我が

宇物を周りて圓明なり、 皇祖の先憂後樂と一つなり、

(三五三)

第三號

圓明也。圓明之義。

君子の時に中れるなり。圓明の義、蓋し

皇祖以是名賜

皇考敬受之。而身心以勗。

安。而期萬方之寧謐。 戶牖以銘也。不求自

不圖自逸。而冀百族

皇考綏履埀裕於無窮也。 之恬熈。則又我

先帝宮室花囿。常恐貽羞。 敢有所增益。是以踐

祚後、所司以建園請 郤之。旣釋服、爰仍

皇考之舊園。而居焉。夫帝 王臨朝。親政之暇。必

得其宜。適以養性。而 有遊觀曠覽之地。然

陶情。失其宜。適以玩 奇技玩好之念切。則 物而喪志。宮室殿御

子之時中也。

皇祖、是名を以って

皇考に賜ふ。

戸牖以って銘す。自から安ずるを求めずして、 皇考これを敬愛し、身心以って勗め、

自から逸しむを圖らずして百族の恬熈を冀へば、萬方の寧謐たらんことを期し、

則ち我が

皇考の無窮に履を綏じ、裕を埀るるなり。

予小子

予小子敬奉

所司、園を建てるを以って請へども、 敢へて増益する所あらんや。 是を以って 踐祚の後、 先帝の宮室花囿を敬奉して、常に羞を貽すを恐る。

之れを郤く。旣に服を釋つ。爰に

皇考の舊園によって居る。

それ帝王、朝に臨み、政を視るの暇には

遊觀曠覽の地あり。

然して其の宜しきを得れば、たま~~以って性を養ひ、

情を陶ず。その宜しきを失へば

たまくく以って物を玩び、志を喪ふ。宮室服御

奇技玩好の念、切なれば則ち、

0

之念疎矣。 親賢納諫。 勤政愛民 賢に親しみ、諫を納れ、政に勤め、民を愛するの念。

其害可勝 疎なり。其の害、言ふに勝ふべけんや。

言哉。我

皇考未就 暢春園而居者。以有此

**圓明園也。而不斷不雕** 

皇考、未だ

此の圓明園あるを以ってなり。而して斷らず。 暢春園に就きて居らざるは

皇祖淳樸之心。然規模之 然れども規模の宏敞

雕らざるは皇祖淳樸の心を一にするなり。

邱堅の幽深

宏敞。邱堅之幽深。風

土草木之淸佳。高樓

風土草木の清佳、高樓 遽室の具備もまた觀止と稱すべし。

觀止。實天保地靈之 遽室之具備。亦可稱

實に天保地靈の區

區。帝王豫遊之地。無 帝王豫遊の地

以踰此。後世子孫。必 これに踰ゆるなし。後世の子孫、必ず

不舍此。而重費民財 これを舍て、重ねて民財を費やし

以ってことに苑囿を創建せずんば斯れ則ち朕が 皇考の勤儉の心に法りて、以って心とすることに

深契せん。

皇考勤儉之心。以爲心矣

契朕法

以創建苑囿。斯則深

祖考所居。不忍居也。則

宮禁又當何如。晋張老

之善頌。甚可味也。

圓

園

の研

祖考の居る所、

居るに忍びざるに籍口すれば則ち

宮禁又まさにいかんすべき。

若 晋の張老の善頌、甚だ味ふべきなり。

(三五五)

史

夫建園始末。

聖人對時育物修文崇武

於樂國之意。則已具斯世於春臺。遊斯人煦萬彙保大和。期躋

**贅一辭焉。** 皇考之前記。予小子何能

若しそれ建園の始末、

聖人、時に對して物を育て、文を修め、武を崇め、

萬彙を煦らし、太和を保つ。

この世を春臺に躋らしめ、この人を

写: 当等) 前門: 具まい)。 樂國に遊ばしむるを期するの意は

巳に皇考の前記に具はれり。

乾隆帝は「後記」 の中で「先考、 予小子、何んぞ能く一辭を贅せん。 雍正帝の勤儉の意に法る心」だの、「奇技玩好の 念が 盛んになれば、 愛民政治の念

わなければならない。 阿房宮以上の豪華殿を地上に実現せしめたのである。換言すれば此の豪奢ぶりは「圓明」という語義を裏切るものと言 に故障を来たして、その害、言うに堪えず」だのと神妙なことを述べ立てて居られるが實際には圓明園を大增築して、 なぜなら前述の通り、 圓明とは君子の時に中ることであり、 中庸の徳を意味し、 すべて過激の欲

念を愼しむことだからである。

を機として、フランスも中國も、 しめたことにあると確信せざるを得ない。 が失政の一つであった」と言って、君王の豪奢を誡めたと近代史は傳えている。 ヴェルサイュ離宮を構築したルイ十四世は、 國勢の振わなくなった原因の一つは、專制君主の大離宮建設によって、 臨終の際、 皇太子を枕頭に呼んで、「巨大な土木工事を起したことは、 ルイ十四世の歿後、 また乾隆帝の崩 民財を枯渇 朕

此の問題が記載されていない。 なお圓明園の增益工事は乾隆何年に始まり、 しかしペリオ博士は「御製圓明園詩」が一七五〇年(乾隆十年)前に編纂の完了したこ 同何年に落成したかに就いては、少くとも私の参照した漢籍文献には、

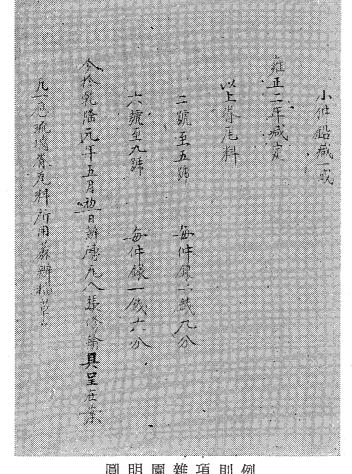


(パリ

圖 は「乾隆己巳(乾隆十四年(望日)の記入がある。またパリー 御製詩集第二十二卷に收載されているし、 國立圖書館に收藏されている「唐岱沈源合作の「圓明園四十景 た御製文集の第四卷に收錄されている。そして此の文集の跋に には 「乾隆九年甲子九月奉勅臣唐岱臣沈源恭畫」という記 「圓明園後記」 もま

とを主張しているが、(Conquêtes de l'empereur de la Chine, pp. 229~230)、実際「圓明園四十景詩」は乾隆

帝の



圓明園雜項則例

(三五七)  $\equiv$ 

史

圓明園襍項價値例

してみると当時、

既に圓明園の廣益工事が殆んど完

文後出)は一七四三年

(乾隆八年)

の日附である。

通りだと思う。

アッチレの圓明園に関する書信

隆治世の初期であったことはペリオ教授の指摘する

入がある。

此らの典據から見て、

圓明園

の告成が乾

成したものと言わなければならない。またアッチレ

き記錄が、先年、同僚奥野信太郞君によって、偶然、北京で發見されたのである。 でなかったと結論することができるであろう。 たのだと説明している。もしアッチレの記述に信を置くならば、 そして圓明園の增築は乾隆帝の即位匇々から開始された事實を證明すべ 雍正時代と乾隆時代の工事は併せて二十年の歲月を出

5

中國では工匠人夫を無限に使役することができるか

かかる大宮殿の建築も此れほど短期間に完成し

國の建築は材料を積み上げることに止まるし、また

雍正、乾隆の三代を通じて僅か二十年を出でず、中

は其の書信に於いて、

圓明園の築造大工事は康熙、

る。 築造工事の見積書とも言うべきもので、大工、石工、瓦工その他、專門の工人がそれぐ〜官府に提出したものと思われ 目下、 例えば「圓明園雑項則例」には左記の記載がある。 この記錄は慶應大學圖書館に儲藏されているので、 私は之れを披讀する便宜を得た。 この記録は言わ ば圓 明園

今於乾隆元年五月初一日、 辨磚瓦人張修翰具呈在案瓦一應琉璃脊瓦料所用蔴辯稻草並

また「圓明園襍項價値例」には

乾隆五年四月十八日傳回准照比例合算。

年ごろ峻功したことが推定されるのである。 以上の年月から見て、 圓明園の擴大工事は乾隆帝の即位匆々から開始され、 また前掲の論據から、 その工事が乾隆八

## 

乾隆帝は圓明園の中に數多の新殿を建築したばかりでなく、 圓明園を本園とし、 近隣の暢春園、 萬壽山、 清明園

その屬園とし

たのである。

園に 華な殿宇を築かれて以來、 宮は清明園と呼ばれて居ります。 る離宮は暢春園と呼ばれ、 ていると申すことができます。 「乾隆帝は圓明園の中に夥しい宮殿を增築されました。此らの新殿は舊殿よりも、 水を供給しているのです。 一明園は大きい一村落であります。むしろ百萬人以上の人口を有する大村落の一 此の泉は如何ほど水に富むとはいえ、 暢春園に近い離宮は萬壽山と呼ばれて居ります。 その後で此の泉は北京まで運河を作って居ります。 圓明園には色々の名稱が御座います。圓明園のすぐ隣にあって、 圓明園の中央に玉泉山と呼ばれる山が御座います。実際この泉が唯今、申上げた 以前の水量の半分しか供給しなくなりました。 この離宮から少し離れた、もう一つの離 しかし乾隆帝が 皆、豪壯であります。 群であり、 その間に圓明 皇太后の住われてい 玉泉山 0 山上に が 位

圓 明 園の 研 究

Troisième

lettre

du

.P

Benoist, Lettres édifiantes et curieuses

(二五九) 一五

史

閣、 屋を並べ、 寺、 明園 館 の 橋津を置いて、 内部には山、嶺、 院 臺、 軒 心ゆくばかり、 壑、 **齋、屋、** 森、 林 居、 叢、 自然の美、 原、 房、 廊、 榭、 人工の妙を味ひ、 橋を配し、 洞、 流 潭、 或は自然の絕景の中に、 溪、 王者の歡樂を恣にしたのである、 峡、 巖、 磴、 徑、 或は自然模景の庭園中に、 圃があり、 これに宮、殿、樓、 樓

の國民性は決して創造的ではない。 (Delatour, Essai sur l'architecture des Chinois, Chap. II. 「中國人の趣味は、 自然に対する好尙である。彼等は此の特有な國民性によって、こういう趣味を懷くに至った。 しかし模倣的である。中國人は庭園の中に自然の縮圖を眺めたいと思っている。」 p. 229)

ば、 額に刻んで、 と題名され の離宮であった。そして乾隆帝は殿堂軒齊や庭叢林陰に、 獨立本殿の集合であり、 「圓明園四十景」 遠くには山を觀、 た諸宮は一 象形文字の美感を弄んだのであった。 の第一であり、 個の獨立した本殿であり、 近くには溪流を聞き、 さらに此れに附屬する無數な別殿の綜和ということができる。 中路賢良門の正面にある「光明正大殿」をはじめ、 眼前には庭徑を目にして、 その周圍には殿宇樓閣が立ち並んでいたのである。 それぐ~優美な名稱を附して、 風光の絕佳、 景觀の幽遽、 「天然圖畫」、「碧桐書院」 そして各本殿の境内にはいれ その風韻を樂しみ、 さすがに大中國 故に圓明園 屋名を遍 は夥し など

例えば、光明正大殿には、左の堂字が附屬していたのである。

21 11 養性 保合大和 1 勸政親賢 22 隨安堂 12 富春樓 2 勸 政殿 23 叢雲 13 3 洞明堂 竹林淸響 24 坐擁 琳瑯 4壽山殿 14 爲君難 **25** 芝原 5 飛雲秤 15 26 蓉洗 如 是觀 16 6 27 清風明月 靜鑑齋 四海堂 7 17 ·懷淸芬 居敬 28 無捲齋 18 小雲來 8 秀木佳陰 29 含眞 19 30 納爽涵澄 這樂經 9 生秀庭 31 20 削玉 自强不息 10 芳碧叢 32 三

反軒。

約四十軒、並んでいるから、それに附屬する建物は可なり多数に達していたと思ふ。 光明正大という本殿には斯くの如く三二の造營物が附屬している。そして本殿は中路、 四庫全書を收藏する文源閣は北路 東路、 西路、 北路にわたって

11 西爽村門 1 出入賢良門 12 蒨園門 2福園門 13 東樓門 3 西南門 14 明春門 4藻園門 15 綠油門 5 餑餑門 16 蕊珠門 6 大北門 17秀清材門(國立北平圖書館の圓明園專號民國二 7大東門 8二宮門 9新宮門 10 運料門

二年五一八月號による)

に獨立していた。

そして門の名を擧げれば、

る。 ただ祭儀執行の際だけ に避けられた。 盛夏、北京の暑さは窒息的であり、殺人的である。故に康凞帝は熱河に避暑山莊を構築して、皇城の炎熱を遠い 次ぎのように述べている。 しかし乾隆帝は此の離宮の擴張工事が告成すると、單に夏ばかりではなく、一年の大半を此の豪華殿で過ごされ、 また雍正帝も乾隆帝も圓明園を以って避暑離宮として、萬機親裁の勞を忘れようと考えられ 皇城に 還御されたのである。当時、藝術家として 在朝を 許されていたフランス耶蘇会士ブノワ た のであ 山間

になります。 されるのであります。それで祭典がすむや否や、圓明園に還御されます。」(Troisième lettre du P. る時を除いて、 に、皇帝は隨員と一緒に、 京に三月間、いらっしやる間は、 「乾隆帝は一年を通じて約三月の間、 冬至は 圓明園でお暮らしになるのであります。そして一定の祭典が催される度每に、 何時も 中國曆の十一月 にあたる筈です。春分は 何時も翌年の二月にあたります。一月十五日迄 圓明園の離宮に行幸されます。この離宮は北京の西北、二公里の地にあります。 夥しい祭儀に臨御されなければなりません。その他の月日は、 北京に住われるに過ぎません。この皇帝は通例、 冬至の前に暫く北京へ 圓明園 韃靼地方に出猟され から北京へ Benoist sans 皇帝が北 、お歸り 出

(二六一) 一七

園

の

## date, Lettres édifiantes et curieuses.) 史

れ 北京の紫禁城から圓明園へ還幸途次、 乾隆帝は当時、暢春園に常住されていた母考、 或は國內を共に逍遙して、謂ゆる愛日の誠を重ねられた。そして当日の所懷を詩に歌われるのが常であった。また 初冬、雨後の美觀を或は律に、或は絕句に歌はれたのであった。 眼前の景象に打たれて、その詩情を即詠し、殊に園内に駐輦中は、 秀聖憲皇太后を圓明園に迎えて、或は宴を催して、今昔の話に興ぜら 暮春、初夏、

秋日、

乙卯後の在位年数に適用すれば、 五首詠ぜられたのであった。帝の在位六十年、二十四年間に圓明園を主題とする詩、 二年)から己卯(乾隆二十四年)に至る御製が收錄されている。併せて二十四年間に乾隆帝は圓明園に関する詩を三十 御製詩集の踒によると、初集には戍辰(乾隆元年)から丁卯(乾隆十二年)にわたる御製、第二集には戍辰 なお多數の御製のあることが推定されるのである。 三十五首を製作された此の比率を (乾隆十

ま御製詩集から、左の二詩を取りだして見よう。

新春恭奉皇太后幸圓明園 新春恭しく皇太后を奉じて圓明園に幸す

寶月行開上元夕 迤邐天街柳漸黃 鳳城煙靄湊韻光 **寶月、行開す上元の夕。** 迤邐として天街、 鳳城の煙靄、 韻光をあつむ。 柳漸く黃なり。

春風先進萬年觴 春風先づ進む萬年の觴

景物逾年倍可人 景物年を逾へて、ますく

瑤階凍草萠新綠 行時未敢弛虔宙 瑤階の凍草、 行時未だ敢て虔宙を弛めず。 新緑を萠す。

### .

暮春圓明園作

經旬未倚畫欄邊<br />
旬を經て未だ畫欄の邊に倚らず。

婉々詔華頓可憐 婉々、詔華、頓に憐むべし。

一嵩水漲恰勝船 一嵩水漲って恰も雨に勝ゆ四野雲低頻釀雨 四野、雲低く頻に雨を醸す。

茂竹修竹蘭亭景 茂竹修竹、蘭亭の景

煙縷暗絲上巳天 煙縷暗絲、上巳の天

暫遣幾間非玩物

暫く幾間に遣するは物を弄ぶに非ず。

贏將詩句答芳年 詩句を贏ちたして、もって芳年に答ふ。

である。 さらに乾隆帝は圓明園の中から、本殿四十を選んで其の美觀を畫院出仕の孫祐と沈源に命じて、描寫せしめられたの かくて詩と繪畫とが一體をなして、藝術の極美を發揮するに至った。その一例を此処に引用してみよう。

### 岩 桐 書 院

水を以つてす。庭の左右に修梧敷本。綠陰、葢を張る。身を淸凉國土に置くが如し。雨聲の 疎滴するに 過ふ每に、尤も我が詩情を動 前接平橋。環以帶水。庭左右修梧數本。綠陰張葢。如置身淸凉國土。每過雨聲疎滴。尤足動我詩情(前は平橋に 接し、環らすに 帶

かすに足る。)

月轉風廻翠影飜 月轉じ、風廻って翠影飜る。

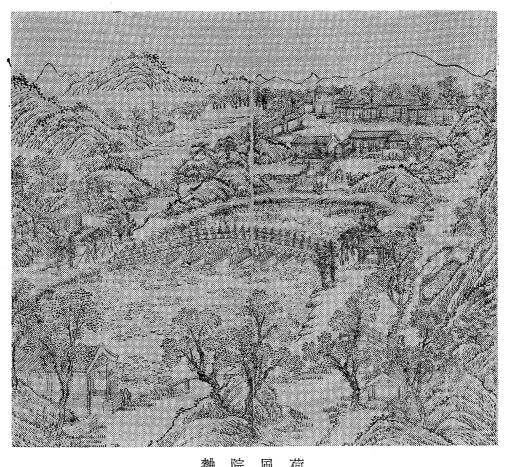
兩窗尤不厭淸喧 兩窗、尤も淸喧を厭はず。

即聲即色無聲色<br />
聲に即し、色に即して、聲色なし。

圓明園の研究

一六三) 一九





荷

院 風

> (二六四) =0

莫問俛家獅子園

問ふなかれ、 俛家の獅子園を。

#### 院 荷

麯

似たり。故に其名を以って之れに名づく。) 名あり。弦の處、紅衣、波を印し、長虹影を搖かす。風景相 麯院は宋時、洒務の地たり。荷花、最も多し。是に麯院風荷 處紅衣印波。長虹搖影。風景相似。故以其名名也。 西湖麯院。 爲宋時洒務地。荷花最多。是有麯院風荷之名。兹 (西湖の

停橈隄畔饒眞賞 亭々花底睡雙鳧

香遠風淸誰解圖 那數餘杭西子湖

香は遠く風淸し、誰か圖を解せんや。 **橈を隄畔に停れば眞賞饒し。** 亭々たる花底に雙鳧睡る。 なんぞ餘杭の西子湖を敷へん。

#### 洞 天 深 處

皇考御題。予が兄弟、舊時の讀書舍なり。) 雑植す。紛紅駭綠、幽嚴石厂、別に天地の人間にあらざるあ 曲折して、蟻の如く盤り、短椽陋室、奧を宣しとす。卉木を 皇考御題。予兄弟舊時讀舍也。 紛紅駭綠。幽巖石厂。別有天地非人間。少南即前埀天耽。 緣溪而東。徑曲折。如蟻盤短椽陋室、奧爲宣。雜植卉木。 少しく南すれば即ち前埀天耽なり。 (漢によって東すれば、徑、

幽蘭泛重荷 幽蘭、 童荷を泛べい

高柯、 憩榭を慕ふ。

**北壑旣虛寂** 細瀑時淙瀉 細瀑 牝壑、 時に淙瀉。 既に虚寂。

亭々松月夜 瑟瑟竹韻秋 亭々、 瑟瑟、

竹韻の秋。

松月の夜。

安知歲月流 對此少淹留 安んぞ歳月の流るるを知らん。 これに對して少らく淹留すれば

願くは君子の儒となり、

逍遙遊をなさざらんことを。

## (II) 圓明園に關するアッチレの記述

從って最も貴重な文献と言わなければならない。私は此の書簡を譯出するに先んじて、アッチレ其人に就いて、聊か紹 チレが故國の友人に送った書簡である。この書信は圓明園の配置結構、其の美觀を知る點から見て、最も詳細を極め、 以上は乾隆帝自身が圓明園に關して殘した文献であるが、圓明園は禁園であっただけに、民間側の文献が 見 當 ら な 幸い當時、 内廷に出仕していた宣教師の方面に、圓明園に關する文献が殘っている。それはフランス耶蘇會士アッ

師は、 していたから、この畵家を通じて、ポルトガルの勢力が清朝に浸透する虞れがあった。それ故、フランス傳道團 當時、最も乾隆帝の籠待に浴していた西洋畫家はカスチリョーネであった。(後章参照) フランス出身の 畫家を清朝に派遣すべきことをフランスの耶蘇會本部に要請して置いたのであった。 彼はポ IV 1 ガ IV 傳道團 この要請に 一の宣教 に屬

圓 眀 園 0 研 介の勞をとりたい。

史

應じて、フランス耶蘇會士アッチレが一七三八年(乾隆三年)八月、北京に渡來したのであった。

その清徳に感心して、ますく、龍待を賜った。 食祿を下賜されるべき內命を傳えられた。しかし彼は此の恩命を拜辭した。なぜなら彼は敬虔な信者であり、 侍從の勸告を容れて、 の臣下となることは宗教上の良心を裏切ると考えたからである。乾隆帝はアッチレが恩命を固辭した理由を聞かれて、 いた。この大作が特に叡慮に叶った結果、乾隆帝の尊影さえも作成する光榮に浴したのである。そして尊像を寫生中、 彼は畵家として、宮中に出仕し、先づ王侯、寵臣の尊像を描き、次いで清朝に新附した韃靼諸王歡迎宴の盛觀をも描 龍顔を殊さら大きく描いたので、特別の叡感にあづかった。それで乾隆帝は彼を四等官に任じ、 異教君主

彼は後年、「得勝圖」(後章參照)の中で、下の三圖を描いた。 和落霍澌之戰。 阿爾楚爾之戰。 凱宴成功諸將士。

牙工、畫工、 チリョーネ、 ぶりを御覧になるため、 た。この如意館は圓明園の出入門、 當時、 圓明園に出仕する宣教師は園の近傍、 寶石工、硝子工と一緒に宣教師のうちの畵工、時計師が働いていたのである。そして乾隆帝は彼等の働き アッチレなどが尊影を描く時には、御居間のそばに畵室を賜った。 この如意館に出御されることが屢ょであった。 賢良門を這入って右折し、 海甸の別舎に住み、兹から圓明園に每日に出仕し、 宮墻に沿うた最端の別殿であった。 この皇帝は特に繪事を愛されていたので、 如意館 この別殿 に中國 詰 て カス の 象

此 らない。故に私はアッチレの書信(Lettre du Frère Attiret de la Compagnie de Jésus, peintre de l'empereur の禁園に出入する特權を持っていた。 この圓明園は禁園であるから、宮嬪以外には出入することができない。しかし如意館に働いている宣教師は、職務上、 Chine à M. d'Assaut. Þ Pékin, le ler novembre 1743. 故に彼等の記述は實見に基づくから十分、信憑性を持つものと言わなければな Lettres édifiantes et curieuses) を譯出す

形の路、 私は長さ十間、 堀が此等の谷底を流れ、敷箇所で會流して池と海とを作ります。人々は美しい豪華な船に乘って此等の堀や池や海を巡覽いたします。 り、その高さは二十尺から五六十尺に及んで居ります。 ら、特にその名を申上げるのです。)一般に圓明園の離宮は多數の本殿から成り立ってをります。この本殿は、それん~離れてをりま ることが出來るだけであります。 此の離宮の景觀には歐洲の建築法、建築樣式に似通ふものが絕無だからであります。 たゞ肉眼のみが圓明園に關する實觀のみを捉え つかります。この谷は地形から見ても、建物の構造から見ても、第一の谷とは全く趣が違って居ります。 しい景色の組み合はせができ上るのであります。 ったりする步廊、 什器が裝備されて居ります。此等の宮殿は離宮として魅惑的なものであります。 どの宮殿も廣い地域を備え、この地域には築山があ 本殿の前面も金箔、 すが、その離れ方にも美しい釣り合ひが取れてをります。そして廣い内庭と庭園と植込みとが本殿と本殿とを隔てゝをります。 りしたいと存じます。この離宮は少くともヂジョン市(Ville de Dijon)の大さを持ってをります。(この都市は御存じの筈ですか 述は此の離宮に關する正當な觀念をお傳へするかも知れませんが、恐らく記述その者が困難に失するでありませう。それといふのも つも見たことがなかっただけに、その雄麗さにビックリいたしたのであります。 私は喜んで圓明園の記述を試みましよう。 圓明園は布置結構から見て、一切が雄大であり、ほんとに美觀であります。 そして私は何處に於いても、この離宮に類するものを 迂路を通って谷から出るのであります。これらの路も小亭や小窟に飾られて居ります。 小さい岩窟の出口で、第二の谷にぶ 幅四間の豪華な樓船を見かけたことがありました。どの谷間にも、岸には五六棟の本殿、内庭、屋根の有ったり、無か 庭園、 琉璃、色彩塗料でギラー〜輝いて居ります。 本殿の内部には本國産、印度産、歐洲産の最も美しい、最も貴重な 植込み、瀧などで完全な釣合のとれた宮殿が配置されてをります。 それ故、若しも餘暇が御座いましたら、圓明園の景觀を精寫した繪畫を二三枚、必ずお手許にお送 ヨーロッパでは美しい、眞直な谷間を辿って小さい谷から出ますが、此處では雁木 かくて小さい谷が敷へきれないほど出來て居ります。清らかな水を湛へたお その結果、一目見ても、感心するほど美

お堀はヨーロッパで見かけるやうに切石を眞直に並べたもので、緣どられては居りませんが、石塊を無 造 作に並べたまゝで、 どの山にも、どの岡にも樹木、 石塊が突きだしたり、 引込んだり致して居ります。そして天工に出づるかと思うほど、石塊が手際よく並べてあります。 殊に中國では極めて有りふれた花樹が一面に植わって居ります。 ほんとの地上樂園で御座います。

圓明園の研究

史

當に押し出されてゐるかと思はれます。お堀の岸には築岩の上から咲きだした花が、此處彼處に咲き亂れて居ります。 廣くなったり、狹くなったりして、彼處でウネってゐるかと思ふと、此處では曲ってゐます。 ひ、時には岸から遠ざかるのであります。 っと適切に申せば細道があります。 小砂利を敷きつめた此の細道は谷間から谷間に通じて居ります。 の上に咲いてゐても、天工のように思われます。四時を通じて季節の花が咲いてゐるのです。 お堀のほかに、どこにも路があり、も ですからお掘が小山や築岩のために本 どの細道も時にはお堀の岸に沿 その花は築岩

ります。こういう二三の御殿の前面には威張つた石像の代りに、青銅製もしくは銅製の人像や象徴的な獸 像が大理石の臺 座の上に飾 蜿々と續く 岩窟の上に 仙女の 靈宮が築かれていると言はれてをりますが、この靈宮にも、 此の御殿に登るのではありません。天然の階段とも思はれる岩を踏んで登るのであります。 劃と構圖の快適な變化を作り上げて居ります。これらの建物は殆んど皆、平屋建てゞあります。 そして地上から二尺、四尺、六尺、 薄黑い磚の墻塀が直立してゐて、よく艶やが出て居ります。屋根は赤、黃、靑、綠、紫の琉璃瓦に葺かれ、琉璃瓦の混在と布置とが區 ざってあります。香爐も同じく大理石の臺座に載せてあるのです。 味のものであり、非常に高價なものであります。 内庭にも、通路にも大理石や陶器や銅で作った花瓶が置かれて、花が一杯さしてあ ん。殿内の廣間は外觀の豪華と完全に一致して居ります。 家具と裝飾品の配置が好いばかりでなく、その家具も装飾品も素晴しい趣 八尺ぐらゐの高さに過ぎません。建物の中で、二三のものしか二階を持っていないのです。 まして藝術的に出來上った石階によつて 谷に着きますと、建物が目にとまります。 建物の前面はズラリと並んだ柱と窓とででき上り、棟木には金泥、繪具、 圓明園の宮殿と似 通ふものは御 座いませ 沙漠の眞中で岩道が峨々として聳えて、 琉璃をかけ、

**墻の末端により、或は築山で隱くされて居ります。** ぞれ違った谷間に、どれだけの宮殿があると思し召になりませうか。 で數軒は北京を距ること五百公里の地方から、巨費を投じて引き出してきた杉材で建築されて居ります。 併し此の廣い園内の、それ りません。併し宮殿自體はヨーロッパの大諸侯と其の隨員とを宿泊させることが出來るほど廣大なものであります。 す。宦官の住宅は何時も宮殿から二三間ばかり離れた處にあります。 の御殿があるのであります。 前に申し上げた通り、到る處の谷の上にも宮殿が立って居ります。 此等の宮殿は圓明園の全面積に比較すれば小さいものに違ひあ なぜ宦官の住宅があるかと申しますと、 これらの御殿の番人をつとめているものは彼等だからでありま 宦官を住はせておく二百餘の建物は別にして、 かなり粗末な住宅でありまして、その粗末だといふ理由から宮

方面の宮殿がお互に見えないやうに宮殿を隔てたり、覆ひかくしたりする森、かういふ一切の景 觀がこの 島の中から一眸のうちに收 ります。この島からこの池の岸に散在する宮殿が悉く見えますし、この池を盡頭とする山々、水を運んだり、此の池へ流れ込んだり、 ます。しかし本當の絕景は小島であり、寧ろ奇峭な、野趣に富んだ形の岩礁であります。 この岩は北海の眞中で、水面から約一間ば 美しく、歐洲人の觀念とは全然、かけ離れたものであります。私は御堀が池すなはち海の中に流れ込むと申し上げました。 も見晴らしの好い橋上に立って居ります。 その他の小亭は木造の牌樓または大理石製の牌樓の兩端にあります。牌樓の構造は極めて 央あるひは末端に休憩用の小亭の附いてゐる橋も見受けられます。 との小亭は四本、八本もしくは十六本の柱で支へられて、普通最 は四十尺を出づることが出來ないのに、曲りくねらせて置くので、百尺もしくは二百尺の長さを持つことが出來るのであります。 は可けません。それどころではないのです。曲ったり、クネったりしてをります。 それ故、或橋が眞直であったなら、三十尺もしく 白大理石の欄干が着いて居ります。それのみか、橋の形もそれぐ~常に違って居ります。 橋が眞直に架ってゐると、お考へになって かれ、二三の橋は木造であり、いづれも自由に船が通れるだけの高さを備えて居ります。 どの橋にも藝術的な淺い浮彫細工を施した 或は此の池から流れだす爲に、この池に達するお堀、お堀の盡頭か、または其の入口にある山々、これらの 橋を飾る亭、牌 樓、同じ ます。この御殿は四面を持ち、到底、お話しの出來ないほどの美しさと趣味とを兼ね備へて居ります。 な場所であります。 この池畔には處々、宏壯な本殿が立ち、その本殿同士が前にお話して置いたお堀や築山によって隔てられて居り 東西南北から測っても直徑半里に近い池があります。この池には海といふ名がついて居ります。 この池のある處が圓明園の眺望絶佳 められるのであります。 かり浮んでゐます。この岩の上に小さい御殿が立って居ります。 小さいとは申しながら、この御殿は百餘の部屋もしくは客間を敷え お堀には處々、橋が架ってをります。それは一處から他處への交通を便利にするためであります。 此等の橋は通例、 その景觀は素晴しいものであ ほんとに

殿を載せた他の覽臺が立ってをります。餘處に瞳を轉ずると、花樹の林が目に這入ります。それから少し離れた所に野生林があり、そ れらの樹木は最も人氣のない山上に生ひ繁るばかりであります。建築用の巨樹、異邦樹、花樹、果樹が目にとまります。 す。覽臺は建物を支へてをりますが、覽臺の各側面に階段がありまして、その建物に登ります。 これらの覽臺の上部には棧敷形の御 る切石の河岸が見え、あちらでは有らゆる技巧を凝らして一種の階段に作り上げられた築岩の河岸が見え、更に 美しい覽 臺が見えま この美しい池の岸は果てしなく變ってをります。一箇所として他に似た處はありません。こちらでは步廊、 細道、通路が 集ってく

圓明園の研究

ります。それと同じく地上では時々、小さい家畜飼養場と狹い猟園に出逢ひます。中國人は特に一種の金魚を賞玩いたしてをります。 ります。それは池中に金魚が散らばらないやうに、極めて細い銅線をめぐらした廣い空間であります。 ほんとに銀まだら、紺、赤、綠、紫、黑、麻色、灰色の金魚、また斯ういふ色の一緒に交ざった金魚がありますが、中國 人の愛する 金魚の多くは、黃金と同じほどキラ~~輝く金魚なのです。庭の中に數種の金魚池が御座います。 最も廣大なものは次ぎのものであ この同じ池の渚で澤山の檻や亭にも出逢ひます。この檻と亭とは半ば水に浸り半ば地上に出てゐるもので、 諸 種の水 禽が飼ってあ

じます。それは水上逍遙、釣魚、競技、槍仕合、その他の遊戯を行ふために、この池上に金泥畫彩の船が充 満する時、殊に淸 夜、花 ーやフランスで見かけた此の種のものよりも遙かに勝れて居ります。 火をあげ、諸方の宮殿樓閣や、全部の船や、殆んど全部の樹木に灯を點ずる時であります。なぜなら灯火飾と 花 火にかけてはヨーロ ッパ人は到底、中國人に及ばないからであります。私は極く僅かな花火を見た丈けでありますが、中國の灯 火 飾や花火の方がイタリ 最後に此の場所だけの美觀を隈なく理解して戴くためには次ぎのやうな場合に、貴下を此處へお連れ申すことが出 來れば 好いと存

場合もしくは叛亂、革命の起った場合に、陛下が安全の地を見いだすためではないのか、この町には、こういう用 途 があるかも知れ 要するに首府の北京で大形にでき上っている建物が、圓明園の此の町では、すべて小形にでき上っているのです。貴方は、何にもかも 銃眼ができて居ります。また町通り、廣場、寺院、中央市場、普通市場、商店、官廳、裁判所、港などが備わっているのであります。 中に立てられたもので、四方にわたって、四分の一公里の廣さを備えてをります。 るのは常御殿のお部屋の中であります。との部屋の中にとそ藝術と善き趣味とが自然の富に加工し得るものが一切、集ってをります。 家具、裝飾品、繪畫(中國趣味の)、銘木、中國や日本の漆器、古陶の花瓶、絹織物、金繡、銀繡の如き天下第一の逸品が見かけられ の御殿は島を作ってをります。四方、廣い、深いお堀に取り卷かれて居ります。この御殿をトルコの後宮と呼ぶことができましよう。 ために過ぎません。皇帝の常御殿は入口の御門の直ぐうしろで、表御殿、謁見の間、內庭、庭園の直ぐうしろに當って居ります。 こ一言すれば少くともフランスの小市ドール(Dôle)の大きさを有する一都市であります。その他の宮殿は殆んど散步と晩 餐と夜餐の 狹苦しく、從って非常に粗雜な此の町が、どういう用途を持つのかとかお尋ねにならずにはいられますまい。 圓明園の眞中に小さい町ができて居ります。この常御殿から、道が殆んど眞直に一つの町に續いて居ります。 この町は全園內の眞 皇帝、皇后をはじめ貴妃、妃、嬪、貴人、常在、室婢、宦官の平生住む場所は、建物と内庭と 庭園との廣大な 組合せであります。 そして東西南北に四つの城門、塔、城壁、 國家に不詳事の起った 胸壁、

りめぐらしてあります。御通過の敷時間前から、御通路に佇むことは、何人にも許されて居りません。 そんなことをすれば護衞から ようと、いつも御苦心なさっていらつしやるのです。 れは道筋にあたる人々を遠ざけると同時に、玉體の安全を計るためであります。かように皇帝は、一種の孤獨の環境に御 生 活なさら 酷い目に逢います。城外に出て田舍道に差し掛ると、二列の騎兵が人垣を作って兩側から、鹵簿より遙 か先 頭に進んで寥ります。そ ません。そういう考は、 なければならないので、中國皇帝は至尊の御身を以つては到底、味えない大衆的快樂を、色々工夫算段して、埋め合せたり補ったりし になるものは何にもないのです。どの家も、どの店も何もかも締って居ります。 申せば天子は尊嚴な餘り、出御の際に庶民にお姿をお見せになりませんし、陛下もまた庶民を御覽にならないからであります。 る大都會の喧噪を御覽になりたいと思し召される度每に、その雛形を親しく御覽になる樂しみを味いたい爲めでありました。 圓明園内に此の町を建設させられた陛下の叡慮に潛んでいたかも知れません。 お姿が人目にとまらないように、到る所に天幕が張 しかし其の主要な動機は、あ なぜと

ぎることがあります。それも叡慮に叶うためなのです。 裁判が行われます。笞刑が宣告されます。その宣告が審査されて、實施されます。時には冗談から駒が出て、罪人に取っては、本物す そして茶屋あり、酒家あり、またどんな身分の人でも泊れる旅館が御座います。立賣商人があらゆる菓物や 飲みものを御 客に見せつ れもない市場の喧噪です。羅卒が喧嘩の當人を捕えます。喧嘩の相手同士は裁判所の判事の許に護送されます。喧嘩は調べられて、 けます。雑貨屋がお客の袖を引き、ウルサク附き纒って、商品を賣りつけようと致します。 割がきまつて居ります。ある商店では家具類のの商店では衣類、婦人の装身具、次ぎの店では好事家、學者用の書籍が見つかります。 きますと、店が開かれます。商人が商品を並べます。ある區域は絹物、 分、職業に姿をやつします。彼等の中には商人になる者もありますし、職人になる者もありますし、また兵 卒、將 校になる者も御座 あらゆる商賣、取引、 と賤民との見境が御座いません。どの商人も持っている品物の名を呼び立てます。立實商人が喧嘩を始めて毆り合いになります。 います。ある宦官には手押車を渡し、他の宦官には脊負籠を渡します。結局、各自、職業上の特 徴を持つのであります。 との町が建てられたのは先帝の御代で御座いました。この御代に於けると同じく今上陛下は、一年に敷回、宦官を使って、大都會の 技術、職業、喧噪、詐偽的行爲を演出せしめるのであります。當日になりますと、どの宦官も、指定通りの身 他の區域は麻類、 ある町筋は陶器、他の町筋は塗物類と皆、地 當日は何をしても闘いません。また皇帝 船が 港に着

この催しにはスリも忘れられては居りません。こういう下司な役目はズバ抜けて素ばしっこい宦官に任かせられますが、 この連

圓明園の研究

墨、笞刑、所拂ひが宣告されます。もしスリがマンマとスルならば、見物人がスリの味方になって、スリが拍手喝 は物の見事に、この役目を果たします。スリは其の場で、つかまると恥をかきます。罪の輕重により、或は 盗品の 性質によって、入 して可哀そうにスラれた商人の訴えが却下されます。しかし此の催しが濟むと、盗品が、もとの人手に返ります。 釆を浴びます。そ

らぐ筈で御座いましよう。 あります。ですから取引はウソイツワリではなく、眞似ごとでもないのであります。皇帝はいつも澤山、 るのです。この町に並べて賣り捌かれる商品の最大多數は北京商人の手持品で、此らの商人が宦官に本當に 賣ってくれと 賴んだので 貴人を二三名すら入場させることは滅多にないのであります。もし王侯貴人が入場するならば、皇帝と宮 嬪との退 場されたあとに限 て商人達ができるだけ高く皇帝に賣りつけることは、お疑いにならないでしよう。貴嬪も買上げますし、宦官も買い取ります。 いふ取引が本物であればこそ、 先きに申上げた通り、此の催しは、ただ皇帝、皇妃、皇嬪のお歡びのために 行われるものであります。それ故、此の 催しには王侯 利害觀念が益ゝ募って、騒ぎも益ゝ盛んになるのです。もし商賣が本當でなかったら、利害 觀念が薄 お買上げになります。そし

だけ田園の質朴さと田舍生活の風儀を眞似するのであります。 蒔きます。收穫物を取り入れ、果實を摘みとります。要するに田舍の行事が全部、玆で見かけられるので御 座います。そして出 來る 牧場、住宅、農家が見かけられます。牛、犂、その他の道具が全部揃って居ります。麥、稻、野菜をはじめ、有らゆる殼.類の種 子を 商賣のあとで、時折、農耕の祭儀が行われます。との同じ境内に、此の祭儀にあたられた地域が御座います。此の地 域には田

で御座います。干金を投じても、到底、作られないものを見かけたことがありました。灯籠の形や、材料や、装 飾をお話 いたそうと 園の離宮に於いては、天井から數個の灯籠が吊り下がらない部屋も廣間も廊下も御座いません。どの堀 割の上にも、どの池の 中國には元宵觀燈祭と呼ばれる有名な祭典のあることは既にお讀みになった筈だと存じます。
この祭は一月十五日に催されます。 灯籠が吊してあります。灯籠は皆、魚、鳥、動物、花瓶、果實、花、船の形をして、あらゆる大きさを備えた名作であります。 中國全體が灯火に輝くのです。どこへ行っても皇居ぐらい灯火飾の美しい所はありません。 特に唯今、お話し致している圓明 堤灯を掲げないほど慘めな中國人は御座いません。 宛ら小舟のように、漂いながら、往ったり來たりして居ります。どの山にも、どの橋の上にも、殆んど 有ゆる 樹の上 硝子、螺鈿などの材料からでき上って居ります。畫をかいたり、縫取を施したりして、あらゆる 値 段のものがあるの 色々な形、色々な大きさ、色々な値段の提灯を作って賣って居ります。そ 面にも

様にわたつていることであります。 したら、切りが御座いません。私が中國人の意匠に富むことに感心するのは、此の點からで御座います。 また其の建築様式が多岐多

樓閣に、 すのか、彼等には其の譯が解らないのであります。康熙帝は西洋館の圖を御覽になって、次ぎのように申されたことが御座いました。 しているので、到底、住むに堪えないと考えているらしいのです。 五階もしくは六階へ昇りながら、日に幾度も頭を割るような危険を冐 他の猛獸の棲みかと同じく、穴を穿った、遙か遠くに見える巖石のように考えているのです。殊に西洋の階 層 造りは、累々、層をな 西洋館を描いた版畫を見せたりすると、彼等は何んと申すか御存じになりたいでしようか。あの堂々たる本殿、あの亭々と聳え 立 つ それ故、自國の建築樣式に見なれた中國人の眼は西洋の建築樣式を餘り鑑賞いたしません。 「西洋では、都市を擴げるだけの地面がないし、 中國人は恐れをなしているのです。彼等は西洋の町通りを、恐しい山中に穿たれた道路と見なし、また西洋館をば、 人間が空間に住まなければならないから、西洋は至って狹く、惨めな ものに 違ひ 彼等に西洋の建築様式を説明したり、 熊やその

我々の結論が此の皇帝の結論と聊か違っていることは當然な話で御座います。

ます。 げましよう。私が中國に渡來して以來、 は、こういう趣味によるものであります。また王侯の宮殿、官廳、やゝ富んだ個人の住宅もまた此の樣式に從って居ります。 するのであります。中國に於いても、そういう對稱、美しい秩序、配置が望まれて居ります。この手紙の冐頭で申上げた北 京の宮 殿 いる公爵夫人の御屋敷は至って美しいと思召しませんか。しかし此の館邸は殆んど中國風では御座いませんか。 式ほど宏壯なものは御座いません。西洋館の方が便利であることは否定できません。 に過ぎません。各國、獨自の趣味と建築樣式を持って居ります。西洋の建築樣式の美しさを認めずには居られません。 さりながら私はヒーキ目から判斷しようとは考えて居りませんが、中國の建築樣式が大そう私の氣に入っている 次第を 包まず申上 聊かも不揃ひな、 ズレのないことを望み、ある一部が他の一部とさし向い、或は對立して、他の一部と正確に對應することを欲 私の眼も趣味も中國化いたしました。 内輪のお話ですがチュイルリー王宮の眞向いに立って 我々、西歐人は到る所に劃一と對稱とを求め すべての様式が次ぎの それは殆んど平屋建 西洋の建築様

和の諸規則から見て、 原理を核心と致しているのです。その原理とは「建築家の表現したいのは、野趣の溢れる田園であり、 しかし離宮では殆んど到る所、 整然と形のととのった宮殿ではない。」ということであります。 孤獨の地境である。

圓明園の研究

(二七四)

史

するのであります。何にもかも善き趣味であります。全體の美しさが一目では目につかないほど、上手に處理されているのです。 工事のすんだ後で、附け加えられた氣が致すのであります。 との説明を聞く方は、これは可笑しい、一見、不快な感じがするだろう のであります。どの本殿も或る異國の意匠とモデルに基いて構築された氣がしますし、一切の建築が 設計なしで置き 据えられ、また 々、檢べて見なければなりません。長い間、心を樂しませたり、好奇心をスッかり満足させるだけの趣があるのであります。 と想像されることでしよう。しかし實見してみると、却って考えが違って參ります。 こういう不調和を巧みに取りさばく技術に感心 圓明園の構内では、本殿が互に可なり長い距離を置いて築造され、互に少しも似 通った本 殿は一つも見かけたことがな

渡來する必要があったのであります。 形、四角形、多角形、扇形、花、花瓶、獸、魚の形、要するに揃った形、不揃いな形の門や 窓を 見るためには、 りでなく、一言すれば其の全體を構成する雑多な部分の中にも存するのであります。 色々な作り方、樣々な形、 素晴しい多樣性に就いて、さらに一言を加えたいと存じます。 その多樣性は本殿の位置、外觀、大きさ、高さ、 して、四百五十萬ウーアンの費用が掛りました。その装飾と家具とは、此の親王の自辨ではありませんでした。 中に小さい御殿の建築されるのを見かけました。 それは康熙帝の從兄にあたる親王の建てられたもので、內部の裝飾と家具は拔きに これらの本殿は郊外の別莊という言葉で云い現わすことができるにしても、單にそういう別莊では御座いません。 昨年、圓明園の この離宮を支配する 數の中に存するばか 私に取っては當地に すなわち圓形、

ど氣持の好いものは御座いません。この建築法には人の心を魅すものとが御座います。 す。そして廻廊は時々は植込みの後を通って、時には巖のかげ、時には小さな泉水の裏をいろく〜曲がりくねって居ります。 この亭は納凉に當てられるものであります。そして珍らしいことは、これらの廻廊が殆んど 直線を 取っていないということでありま 穿たれて居ります。窓には皆、透かし彫が施してあります。それは四方、開け放しの亭へ御殿を繋ぐ廻 廊と同じことで御 座います。 り離れている本殿と本殿とを繋ぐ役目を致して居ります。 そして廻廊は時折、内部は透かし彫、外部には、それぐ~違った形の窓が 次ぎに廻廊のことをお話しようと存じますが、こういう廻廊を見るのは、當園だけに限ると信じて居ります。 此の廻廊は互に可な これほ

當然な話で 御座います。かくの如き 費用を拂ひ得るもの、しかも此れほど 短日月の間に、かほど驚くべき大計畫を 實 行し 得るもの 私が今迄、申上げたことから見て、この離宮の建築には莫大な費用を要したに違いないと結論されずには居られますまい。 中國の如き大國家の主人たる君王を除いては、他に存在しないのであります。 という譯は、此の離宮は僅か二十年間の工

事であり、此れを起工されたのは、今上帝の父考であり、今上帝は之れを增築して、美化したに過ぎないのであります。

宮の縮圖に過ぎないのであります。 現在でも母后が、その朝臣と一緒に住われて居ります。この離宮は長春園と呼ばれています。そして宗室と大諸侯の離宮は、皇帝の離 ります。置き据えさへすれば宜しいので御座います。二三ケ月、工事を續ければ、建築の半分は終ってしまいます。 美しい谷間に、 す。しかし此れらの離宮は圓明園よりは小さく、さほど美しくは御座いません。そのうちの一つは、 て居ります。乾降帝のお持ちになるのは、この離宮ばかりでは御座いません。皇帝は他に同じ 趣味の離宮を三つ 持っていらしていま または山裾に、魔法がかりで忽然とでき上った御伽噺めいた御殿のような氣が致すのであります。 それに此の離宮は圓明園と呼ばれ かりでなく、勞働者を無限に增加することができるからであります。 建築材料を其場に運んで來さへすれば、即座にでき上るのであ しかし此の點に就いては、少しも驚かれたり、不審に思われたりする筋合がないのであります。 それは建物が總て一階建であるば 祖考康熙帝の建てられたもので、

う。私に繪心のあることが仕合せです。畫才がなければ、他の宣教師と同じく、二十年、三十年、當地に滯在しても、 まだ足を入れなかったかも知れません。 圓明園に這入りたいと思う度每に、また 必要時間だけ、此の 園内にとどまりたいと思う度每に、許可を得ることが必要でありましよ ませう。 ところが私には自分の時間が一刻もありませんし、お手紙を書くためにも睡眠時間を割かなければならないのです。それに も解りません。しかし此の見取圖を作るには、少くとも三年間ほかの仕事をやめて、これに 専心しなければならないとお 答えいたし とんなに長ったらしい私の起述が何の役に立つかと仰有るかも知れません。 この豪華な離宮の見取圖を作成した方が増しだったか 此の離宮には

中國には、ひとりの人間しか居りません。その人とそ皇帝であります。

は如意館より先きには参りません。此の小殿より先きに参る場合には、役人から案内されて、また澤山の宦官が附いて参ります。 出御されるのは、この御殿であります。だから留守にすることができません。私達のかくものが運搬できないものでない限り、 段、畫をかく場所は、前にお話し致した小殿の一つ如意館であります。殆んど每日、皇帝は私どもの働きぶりを御覽にならうとして、 當地に滯在している宣教師の中で、必要上もしくは職務上、到る所に接近するものは、畫家と時計師 ばかりで御 座います。私達が普 一人とないのであります。皇帝は王族も諸侯も謁見の間にお通しになるだけで、それより先きの室内やお庭にはお通しになりません。 すべての歡樂は、上御一人の爲に行われるのであります。この豪華な離宮を目にするものは、 皇帝、 嬪妃、宦官のほかには、殆んど

圓明園の研究

ます。そのときは皇居の内部に居りますが、夕方、我々の教會へ歸るのであります。」 は圓明園に近い可なり大きな町、むしろ村の中に宣教師の買いとった住宅に歸ります。皇帝が北京へ還御の 節は、 この離宮と北京との距離はパリーとヴュルサイユの距離に匹敵して居ります。私達が圓明園にいる間は皇帝の御馳走になります。 園を眺めたり、駈けめぐったりしたのであります。どの御部屋にも這入りました。皇帝は 每年、十ケ月間、圓明園に 滯在されます。 どもは惡い事でもするように、爪先立って、音も立てずに、急いで歩いて行かなければなりません。 こうして私は圓明園の美しい庭 私達も 北京に歸り

書信 景觀を紹介している。この紹介はアッチレの記述よりも遙かに簡略であり、言はば其の內容を要約したものと言うこと 實性を實證するものであると同時に、圓明園その者の豪華宏壯をも立證するものでなければならない。故にブノワ書信 ができるであろう。しかし二人とも圓明園の實見者であるから二人の記述が共通的內容を有することは、その內容の眞 をも譯出してみよう。 アッチレと同じく乾隆帝に奉仕していたフランス耶蘇會士ブノワは一七六七年(乾隆三二年)祖國の友人 に 送 つ た (Lettre du P. Benoist à M. Papillon d'Auteroche, A Paris, le 17 novembre 1767.) の一節で、園明園

ものは、自己の技巧が、その痕跡を示さずして、しかも自然を、よりよく模倣するに至らなければ、 「中國人は庭園の裝飾にかけては、天工を完成する技術を用います。その技巧は非常な成功を示して居ります。 賞讃を博することができないの それ故、造園家たる

さに打たれ、これに魅惑されるのであります。それから數百步、足を運ぶと、新しい景物が 眼前に 現われてきて、またもや感心する ません。なぜと言えば眼が視力の範圍と比例するだけの視野に制限されているからで御座います。 人は全景の一部を觀て、その美し しいので、特殊な景物に氣を入れることができません。しかし中國では趣が違って居ります。 中國の庭園では眼が少しも疲勞いたし ーロッパでは路が遙々、見えなくなるまで、續いて居ります。 また物見臺に登れば、遠方の物が澤山見渡せられ、その景象が夥

**圓明園は、色々、違ったお堀で區切られて居ります。** そのお堀は築山の間に蜿々と流れ込み、あちらこちらで、岩の上を流れて、

と野趣を加える爲にほかなりません。 を土臺にして嚴丈に積み重ねられて居ります。時折、石工が其の崕石に長い間、加工するのは、その崕石の亂 雑さを 増大して、一段 らのお堀と池との岸は亂雑であり、崕に覆われて居ります。しかしこの崕はヨーロッパの崕とは大いに趣を異にして居るのです。 瀑布を作ります。時には谷と谷との間に集って、池を作ります。その池の廣さによって、湖とか海とか名づけられて居ります。 ーロッパでは崕に非常な細工を加えて、野趣を隱くします。 ところが圓明園の崕は天然石と思われる岩からできていて、その岩も柱

色々目にとまります。 木が季節には、とりどりの花で一面に覆われて居ります。 また他の場所では、季節によって植えかえなければならない花卉や草木が のものらしい穴があいて居ります。その穴の中から、大木が生えだしているのです。また他の場所では、灌木が生え出して、その灌 時には石が洞窟を作って居ります。その洞窟は蜿々、山上を繞って、快適な宮殿に導きます。 水邊でも、山上でも、岩山の間に天然 には、この岩はドッシリ据っていても、今にも落ちそうな氣がして、岩に近づくと、壓し 潰されるかと 思はれることも御座います。 が大そう乘りよく積み重ねてあります。山上では、これらの石が、遠く見渡すと、岩の形をするように裁ち切られています。 また時 お堀の岸では、色々な場所に、乘船の便宜を計るために、石段ができて居ります。 水上を逍遙しようとして、船に乘るとき、

存する場所が二三、見られます。田畑を耕したり、種子を植えたりする為に、村落が二、三箇所立って居るのです。 そして此の村の 年のそれど〜違った季節に、中國産、日本産、ヨーロッパ産の最も貴重な品物を市場のように集めてくる役目を致して居ります。 の中に立って居ります。また他の宮殿は、ある山の傾斜の上に、或は氣持の好い谷間に立って居ります。 の宮殿を除いて、園内には猶、夥しい御殿が立って居ります。 人達は、絕對に自分の住んでいる村から外に出ません。 また商店の立っている村らしいものと目にとまります。これらの商店は、 皇帝と廷臣の住居にあてられている御殿は廣大な地域を擁し、此の御殿の中には天下の美を盡した珍寶が蒐められて居ります。 ある宮殿は廣い池のほとりに立ち、他の宮殿は池の眞中に拵えた小島 麥、稲、その他の殼物を保

を去って、他の場所を見に行くことは絕對に許可されないのであります。」 帝が王族、もしくは朝貢國の君主を園內に招待されます。しかし彼等はただ招待された場所に案内されているだけです。 では王侯貴人の宮殿も庭園も開放されて、殆んど公共的であります。ところが北京では親王、王族、大臣、大官すら、何人も此の園內 に一步も踏み入れることができないのであります。ただ宗室だけが這入れるばかりです。時には観劇、時には或る觀もののために、皇 圓明園は、ただ皇帝と朝臣とのために存在するものであります。なぜと申せば當地はフランスと違うからで御座います。 フランス

圓明園の研究

5 Monsieur et administrateur de sa bibliothèque à l'Arsenal)は中國文化に對して深甚な 興 味を 懷いていたか は割愛することにしよう。 cet empire, rédigée d'après de la Mission de Paris. A Paris, 7 vol. 1817~1820)を編纂して刊行した。 traduites du Toung-kien-kang-mou, par le feu Père de Mailla, 13 vol. 1777~1785)の刊行に關して、斡旋 ヤ師の「支那通史、通鑑綱目」 の勞を取ったのは此のグロジェ師であった。なお彼には「支那通誌」(De la Chine, ou Description générale de フランス王兄の文 この書の第七卷に、圓明園に關する記述が發見されるが、その內容は主としてアッチレ書信に基いているから、 常に北京在住の耶蘇會士と連絡を保ち、彼等と書信を交換したり、その研究を閱讀したりしていた。 庫 係 を 勤 (De Mailla, Histoire générale de la Chine ou Annales de cet empire, めていたグロジェ師 (L'abbé Grosier, bibliothécaire de son Altesse 現にド・マイ 茲で

## (IV) 圓明園に西洋樓と噴水の築造

宣教師に政治的陰謀ありという風聞が流布されると、 道教が信奉されていたから、中國政府はキリスト教を異端の邪教を見なして、所謂、 宣教師が中國に渡來した目的は、 しかし宣教師は單なる傳道師ではなかった。彼等は一流の科學者であり、また藝術家であった。殊に中國は昔から天 福音宣傳にあったことは申すまでもない。 政府は異教の禁令を强化して、 しかし中國には遠い昔から儒教、佛教、 宣教師の行動を監視していた。 天主教を排斥したのである。 殊に

文曆數の進步を誇っていたにも拘らず、

採用し、

また欣天監正

(天文局長)同監副に宣教師を起用したのである。

中國天文學の缺陷が宣教師によって實證された。

故に中國政府は初めて洋暦を

殊に康凞帝は西歐天文學を敬重したばかりではない。 帝は宣教師を侍講に擧げて、西歐の數學、 特に幾何學 を 實習

解剖學、 化學をも習得されたのである。

令を解除した。 できた。康凞三一年(一六九二)、帝は宣教師の奉仕を多とし、 したとき、 通譯として淸國全權索額圖に隨行し、ネルチンスク會商に參加した。そして黑龍江問題に關して、 康熙二八年(一六八九)フランス耶蘇會士ジェルビヨン (Gerbillon) とポルトガル耶蘇會士ペレイラ (Pereila)とは、 兩宣教師は居中調停の勞をとって、 かくて中國々民は此の異教に入信することができたのである。 清露全權の主張を緩和し、遂に清國側に有利な條約を締結させることが また國家に對する外交上の忠誠を嘉みして、天主教の禁 清露談判が決裂に

これが北堂であり、 て、一日にして快癒した。それ故、帝は彼等の功勞を賞して、 いたフランス宣教師は此の北堂に移轉して、漸く生活の自由をかち得たのである。 (一六九三)、帝は偶と瘧を疾った。そしてフランス耶蘇會士の献進したキナ劑を飲むと忽ち 東洋第一の壯麗な會堂であった。今までポルトガル耶蘇會士の教會、 西安門內に廣厦を賜い、之れを教會に改築せしめられた。 南堂 (宣武門内)に同居して 高 が 下

レジス 師は 皇帝は初めて自國の全貌を正確に知ることができたのである。 康凞四七年(一七〇八) 諸省の地形を實測し、 (Régis) ジャルトウー(Jartout) 康熙帝は中國地圖の作成をフランス耶蘇會士ブーヴェ(Bouvet)ド・マイヤ 約八年を經て、遂に此の大事業を終えた。これが有名な「皇輿全覽圖」である。かくて中國 の四師に命じ、この事業のためには、經費を惜しまざる旨を傳えた。 (De Mailla) 宣教

4 熙帝は無論、 西洋の科學文明を必要なりと考えられていた。さればこそ帝はキリスト教を解禁したのであった。 天主教には好意を懷かれていなかったが、國家の運營上から見ても、 個人的享樂という立場から見て けれども宣教

圓明園の研究

側から言えば、 を利用したのに過ぎなかっ 教師は確信していたからである。しかし康熙帝は彼等の法話をば笑いながら聞き流していた。 益々福音を説いたのである。 であり、 西洋近代文明の吸收が第一義であり、天主教の解禁は、 科學知識の普及はその手段に過ぎなかった。 福音宣傳が本來の目的であり、 た。 なぜなら専制君主を天主教に改宗させることができれば、 それ故、 康熙帝の立場と宣教師の立場とは全然、 また彼等の使命であった。彼等は此の目的を達成せんが爲に、 とにかく宣教師は禁令撤回の幸運を歡び、 その手段であった。 しかし宣教師から見れば福音宣傳が第一 食い違っていた。 國民全部が之れに倣うものと宣 康熙帝自身に對して、 康熙帝· から見 れ ば

在朝の宣教師にも恩待を加えなかった。 ス耶蘇會士パ 康熙帝に次いで卽位した雍正帝は佛教、 ールナン (Parrenin) を校長に選任した。 しかし帝は外交官養成の目的を以って、北京にラテン語の學校を設け、 特に道教の篤信者で。あった從って天主教には平素、好意を持たなかったし、 フラン

逆する虞があるという疑念であった。 の理由は、 僅か十數名の宣教師を北京の會堂に殘留せしめられたのである。 きた福音宣傳の道も一朝にして杜絕するに至った。さりながら雍正帝は、 かし雍正元年 中國の天主教徒は、 (一七二三) 福建省に迫害が起ったとき、 自國の君主よりも、 かくてマテオ・リッチが開教して以來、 口 1 マ教皇を信賴しているから、 帝は天主教を嚴禁して、 天文學者、 幾多の艱難と殉教とによって、 一朝、 美術工業家という資格に於いて、 國内から宣教師を放逐され 有事の際、 彼等は國家に叛 發展して た。 そ

で、泊害事件が發生したとき、帝は言を左右に託して、 乾隆帝は 師 0 心裏を洞察して、巧みに彼等の科學知識と藝術的才能を利用した。 雍正帝と殆んど同じ意識を持っていた。 しかし此の帝の方が遙かに老獪であった。 宣教師の懇請を斥け、 今 絕對に禁令を解かなかった。 在朝の宣教師が乾隆帝の 乾隆九年から同十一年ま た それのみ めに奉仕

た事業の要目を擧げれば次の通りである。

- (I) 圓明園に西洋樓の建設と噴水の構築(乾隆十二年頃、一七四七)
- (Ⅱ) 模型劇場の献上と器械人形の製作(乾隆十六年、一七五一)
- (Ⅲ)「得勝圖」の製作(乾隆三○年、一七六五)
- (Ⅳ) 「坤輿全圖」の作製(乾隆三二年、一七六七)
- (V) 「皇朝中外一統輿圖」の作製(乾隆三七年、一七七二)
- (Ⅵ) パンシの尊像寫生(乾隆三八年、一七七三)
- (Ⅲ) 望遠鏡の説明と排氣機の御前實驗(乾隆三八年、一七七三)

て歸國の意志を北堂長に傳えた。北堂長は俗人に對しては强制權を持たなかったから、ギラルヂニーの歸國を諒承した 寧)であった。既に康熙時代にはギラルヂニー(Ghiardini)という洋畫家が朝廷に奉仕して、帝の恩待を蒙っていた。 しかし此の畵家は耶蘇會の僧侶ではなかった。彼は市井の一俗人に過ぎなかった。程なく彼は異鄕の風物に鄕愁を感じ 乾隆時代に在朝して最も恩寵に浴したものはポルトガル傳道團 所 屬イタリー人カスチリヨーネ(Castiglione 郞 世

選んで、これを自然科學者、或は畫家に養成していた。 國皇帝の趣味に迎合して、禁敎解除を實現しようと意圖していたから、此の目的のもとに、團員の中から適當なものを ポルトガルの耶蘇會はギラルヂニーの後任者を物色していたが、仲々、見つからなかった。前述の通り、耶蘇會は中

のである。

それでポルトガル耶蘇會はカスチリヨーネを適格者と認めて、これを中國へ差遣した。カスチリヨーネは康熙五四年

圓明園の研究

(三八一) 三七

(一七一五) 北京に到着して、 内廷に出仕した。<br />
當時、 彼は二十七歲の壯齢であった。そして康熙、 雍正、乾隆の三代

に仕えて、左記の名畵を遺した。

馬罕四駿。哈薩克貢馬圖。八駿圖。春郊試馬圖 撫元人秋林群鹿。準喝貢馬圖。大宛馬。 如意驄。瑞麅圖。瑪瑺斫陣圖。抜達山八駿。王鷹。 (唐岱と合作)百駿圖。香妃像。 圖阿玉錫持矛蕩寇圖。 愛

にもまた妙手であった。乾隆帝は少時、カスチリョー これら題名から見て推定される通り、 カスチリヨーネは動物、 ネの描いた自己の<br />
畵像を<br />
脱年、<br />
學問所の<br />
楣間に<br />
見いだして、<br />
左の 特に馬を描くことに名手であった許りでなく、肖像畵

寫眞世寧擅。寫眞(肖像畫)世寧、檀にす。

詩を賦した。

績我少年時。 我が少年の時を績く。

入室皤然者。室に入りて皤然たる者。

不知此是誰。これこの誰なるを知らず。

せしめた。そのときカスチリョーネの署名した作品は左の二圖である。 清軍が準喝爾部、 ーネ、アッチレ(Attiret)、シッケルバルト(Sichelbarth)、ダマセーヌ(Damascène)に命じて、「得勝圖」を執筆 その他、 「如意驄」、「玉鷹圖」に就いても、一詩を賦して、郞世寧の妙 技を稱えた。また乾隆二四年(一七五八)、 回部を戡定した時、乾隆帝は、この大勝を長く後代に記念しようとして、在廷の耶蘇會士カスチリョ

黑水圖解。格登鄂斫營。

か くの如くカスチリヨー ネは在朝の<br />
畫家として<br />
最も帝龍を博していたから、 迫害の起る度每に、 宣教師一同から推さ

れて、 代表者となり、 絕對にカスチリヨーネの懇請を容れなかった。 天顔に咫尺して、天主教解禁の件を懇願した。 しかし乾隆帝は自己の趣味と政治とを混同 l な

たから、

判的な態度を示していた。當時、 精神が漢化してしまった。それ故、 清朝は満洲出身であるから、 文化らしい文化を持たなかっ 中國では密畫が流行していたので、カスチリョーネにしろ、アッチレにしろ、 西洋の繪畵、 特に建築に就いては、 た。 その結果、 前揭、 漢民族の文化を踏襲したので、 アッチレの書信に見える通り、 遂に かなり批 西洋畵 は 其 0

のである。

風に密畫風を取り容れなけば、

皇帝は決して満足されなかった。

故に宣教師の描いた作品は純粹な西洋畵ではなかっ

た

明日、 る。 されたかを立證するものでなければならない。 既に適任者のあることを確信されていたのである。この事は西洋噴水の圖を御覽になって、 上からも、 カスチリョーネを呼びだして、噴水の説明を求められた。説明がすむや否や、 人物ありやと尋ねられた。 ネは字義通り恐縮したが、 乾隆十二年(一七四七)、帝は西洋噴水の圖を御覽になると、 然るに帝は御座所に引きとられるや否や、宦官をカスチリョーネの許に遺わして、 幸ひフラン 参内して同伴せよと命ぜられた。カスチリョーネは適任者の有無に就いて、<br /> 叡慮に迎合することが宣教師の義務だったのである。 ス傳道團の中からブノワを見いだすことができたのである。 しかしカスチリヨーネは即答を避けて、 專制君主の命令は法令であるから、 同時に専制君主の横暴ぶりをも窺うことができる。 新鮮な好奇心が刺戟された。それで直ちにお氣に入りの 絕對に服從しなければならない。そのうえ解教實現の かくてカスチリヨーネは必死となって適任者を物色し 同僚と相談の結果、復答すべき旨を奏上したのであ 在朝の宣教師中で、噴水を構築し得べき 深い疑念を持っていた。 噴水の製作を任すべき宣教師 いかほど帝の好奇心が とにかくカスチリヨ しかし乾隆 刺戟

圓 園 0 研

二大三 三九

(二八四)

四〇

圖らずも此の經驗が役に立って、噴水すなわち中國語で言えば「水法」を築造すべき重任を擔うに至ったのである。 ブノワは 祖國で傳道の傍、 天文數學を學び物理學をも研究した。また水力器機の製作ににも關係したことがあった。

ヨーネの設計図 カスチ IJ

西洋館の構築は噴水との調和上の必要だ 建築することが、帝の第一次要求であり、 たと言うことができよう。

たことは前述の通りである。

故に噴水を

噴水構築の能力者を探し出せと嚴命され

ネを御召しになり、<br />
宣教師の中から、

るや、好奇心を刺戟され、直にカスチリヨ

七年(乾隆一二年)西洋噴水圖を御覽にな

とは明かである。然るに乾隆帝は一

七四

故に西洋樓を建築する意志のなかったこ

は西洋の階層建築を好んでいなかった。

前掲アッチレの書信によれば、乾隆帝

西洋樓の設計と工事監督とをカスチリ ネが擔任したことは、<br /> 次ぎの書信に

 $\exists$ 

よって確證される。

と監督のもとに建てられたものであります」(Lettre du P. Amiot au P. de la Touro, 『ブノワ師は二三年前、 最も變化に富み、また最も爽快な噴水に水を供給する爲でありました。 有名なヴァル・ド・サン・ピエールの器械を製作しました。それは西洋館の周邊を美化すべ この西洋館はカスチリヨーネ教兄の設計 A Pékin, le 17 octobre

容易く推測することができよう。 西洋樓の設計と工事監督、 また噴水の設計と工事監督に就いて、 しかし此の大工事に對する困難は意外な方面に存在していたのである。 カスチリヨーネとブノワとが如何ほど苦心したかは

1754. Lettres édifiantes et curieuses)

ば、必ずや國家の不祥事が發生するに違いないと言ひ觸らしていた。しかしながら龍顔を冒して、諫議を試みるものは のである。それのみか中國には怖しい迷信が横行していた。大臣諸侯は西洋樓の如き 西夷の 造營物を 皇宮に 建設すれ から、此の計畫に關係する大官は、カスチリヨーネとブノワに對し、絕えず敵意を示して、工事を妨害しようと企てた 一人もなかった。 中國人は元來、 彼等はただ迷信的風聞を朝廷に流布して、乾隆帝自身が洋館建設の大計畫を自發的に放棄されること 排外的であり、 謂ゆる攘夷主義を信奉していたし、殊に天主教に對しては根深い憎惡心を懷いていた

ところが乾隆帝は、さとくも這般の事情を推察し、 宣教師を激勵されたばかりでなく、 圓明園 内に自由に出入する恩

典をも與えられたのであった。

を秘かに期待していたのである。

この工事が何年か 西洋樓と水法とは圓明園の屬園、 かったか、 資料に乏しく明言することはできない。 長春園の北路に構築された。 しかし乾隆十二年頃には完成したらしい。

後章に於いて陳述する通り、 圓明園は一八六○年、英佛聯合軍に依って燒却され、 しかも清朝が荒廢に任かして置

圓明園の研究

(二八五) 四

で、西洋樓の全貌を想見することが可能なのである。 落ちたが、 唐岱沈源の合作畵とブノワの記述を除いては、 た結果、今日では全く過去の存在と化して、その片影すら見ることができない。そして御製「四十景詩」に挿入された 幸い二十幅の銅版畵が殘存しているし、またフランス側には、 圓明園の景觀を窺ふことができない。 西洋樓の建築に關する解説と批評とがあるの 西洋樓もまた兵火にか かっ て焼け

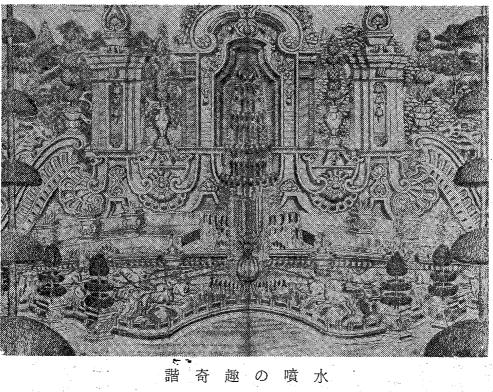
版 國畵家が初めて畫いた西洋畵として、その藝術的才能を窺ふべき試作と言わなければならない。 は皇帝の眼前で草圖を描い 西洋畵を習っていた中國人の畵家、二三名を呼び出させれて、西洋樓の圖繪を製作せよと命ぜられた。これらの中國家 洋樓二十景圖」を送った。 き許可を與えられた。要するに此の銅版畵は中國畵家が、 畫を所藏しているから、<br /> 北京在住のフランス耶蘇會士ブールジョワは一七八六年(乾隆五一年)パリーのドラトゥールに書信と一緒に 私は親しく檢覽することができたのである。その目次を擧げれば、 この書信によると、 た。 乾隆帝は屢この草圖に修正を加えられた。そのあとで遂に此れらの下圖を銅版に彫刻す 乾隆帝は一七五七年 西洋畫家の監督の下に完成したものである。 (乾隆二二年)、 かねてカスチリヨーネに就 幸い 東洋文庫は此 換言すれば中 「圓明 こ の

画。 法山門正 (1)(6)諧奇趣 竹亭北面。 蔥 南面。 (18)線法山正面。 (2) 同北面。 10海晏堂西面。 似同東面。 (3) 蓄水樓東面。 仙同北面。 20湖東線法畫 (2)同東面。 4)花園門北面。 (13) 同南面。 (5)花園正面。 似遠瀛觀正面。 6)養雀籠西面。 15大水法正面。 ⑦養雀籠東 16觀水法正面 画 (8)方 外 觀 (17)Œ. 線

この目次から見ても十二の西洋館が構築されたことが解かる。

5 さてブールジ 絕えず中國在住の耶蘇會士と文通していた。そして宣教師の手を經て、 ョワから此の版畵を寄贈されたドラトールは、 かねて中國に對して、深甚な關心と興味を懷いていたか 中國 の國産品や美術品を蒐集していた。 彼

はブールジョワから寄贈された西洋樓二十景圖繪を見て、その論評を自著「支那庭 園 建 築 論」(Delatour,Essai sur



明園の研究

圓

l'architecture des Chinois sur leurs Jardins et leurs mœurs\_et usages, 1784) の中に收錄した。この書は僅か三十六部の限定版であるから、稀覯書中の稀覯書として尊重されている。なお先年、出版されたモーリス・アダム著「圓明園」(Maurice Adam, Yuen-ming-yuen, l'oeuvre architecturale des anciens jésuites au XVIII siècle, Péking, 1936)も参照すべき價値を持っている。

の口から高く噴水していた。 泉中の中央と左右に水塔を置き、周圍には禽獸の像を飾って、そ 最も大きな池はヴェルサイユやサン・クルーの池に匹敵していた。 最も大きな池はヴェルサイユやサン・クルーの池に匹敵していた。 の口から高く噴水した。後は先づ諸奇趣に噴水を装置した。噴

一刻每に交る交る此の獸像の口から水を噴き上げさせて、一種のも趣向を凝らし、瀑布の周圍に十二支の獸像を二側に配列して、一ついでブノワは海晏堂にも噴水を裝置した。彼は此の噴水に最

(二八七) 四三

時計に供したのである。

海晏堂の隣り、 遠瀛觀にも大水法を築造した。 前面の巖上、 池中、 地塘には 「禽獸合戰」、「犬に追い詰められ

の狀景を配した、禽獸の口から噴水せしめたのであつた。

乾隆帝は第一の噴水を御覽になって、大いに感心されたが、 第二、 第三の噴水を叡覽されると、 その絶妙な意匠 に感

歎されたのであった。

なかつた。總て事大主義を奉ずる乾隆帝が、その西洋趣味を満足されたことは言うまでもないのである。 西洋樓と水法とは中國に於ける最初の西洋建築であった。 殊にその大装置はヴェ ルサイユ離宮の設計に優るとも劣ら

## (V) 圓明園に於ける掠奪と其の燒毀

が圓明園に這入って掠奪を恣にしたこと、ついで報復のために此の豪華殿を燒き拂ったこと――この二項に就いて、 か其の原因を追究し、且つ其の情景を描出したいと思うのである。 一八六〇年に起った清國對英佛戰爭に關して、その原因や其の過程を研究することは、 本稿の目的ではない。 英佛軍 聊

園 いう譯か、兩軍、途を失って別れ別れになり、六日、英軍は北京城外の黃寺に達して、そこに宿營したが、 の門前に到着した。そして英軍の騎兵隊も道を失って、 八六〇年十月三日、英佛聯合軍は北京に向って進撃を開始した。英軍を先頭として、 佛軍のあとから、 圓明園に達したのである。 佛軍がこれ に續い 佛軍 たが、どう は圓明

驚したのは、 十月七日、 早朝、佛軍司令官モントゥバン この離宮の豪華と風景の絕佳なことであった。そして將軍は本殿にも別殿にも到る所に貴重な美術品や工 (Montauban) 將軍は圓明園內を巡見した。そして先づ此の將 軍 の 眼

藝品が字義通り充満していることに益々驚いたのである。この狀景を見ると、先づモントゥバン將軍の意識に登場した 彼等の立場から見れば、掠奪は勝者の餘得であり、言はば光輝燦爛たる公盜であった。また掠奪は勝利の樂し のは掠奪という觀念であった。 この樂しみがあればこそ、 士卒は流血や落命の危險を冒すのだと言うことができるであろう。 古來、戰勝者が敵の財寶を掠奪することは、彼等の常習であり、 言はば特權 で みで あ

開始時間を延期せしめたに止まるのである。 かも知れない。 もまた自然の道理である。 力。 K 佛軍は英軍よりも先きに圓明園に到着したのであるから、もし佛軍が掠奪を開始したとすれば、佛軍の方が掠奪上、遙 しかし此の禁令は掠奪その者を禁止したのではない。掠奪開始の時間に制限を加えたに過ぎない。 有利な狀態に置かれていることは言うを俟たない。かくては今迄、 こういう想定から、 故に英軍を差し置いて、佛軍が掠奪を開始するならば、今後の作戰上に支障を來たす虞がある 佛軍の司令官モントゥバン將軍は英軍の到着するまで掠奪を嚴禁したのであった。 從って此の將軍もまた掠奪の權利を認めていたことは明かである。 協同作戦を取つてきた友軍の感情を害すること 換言すれば掠奪の

ない。 見いだした。そして英軍指揮官グラント た。本殿に近い或る建物の中には山嶽砲が二門、並んでいた。中國皇帝は此の武器を裝飾品として取扱っていたに違い 光明正大殿には硬玉、 佛軍から一日おくれて英軍の本隊が圓明園に到着した。そのとき英軍は佛軍が正大光明殿の門側に駐屯しているの 圓明園 の或る本殿から夥しい數量の金銀塊と絹織物、 碧玉、 銅器が充満し、また外國使節の献上した置時計、 (Grant) 將軍もまた先づ圓明園の宏麗と清潔なことにビックリした。 毛皮とが發見された。 懷中時計も數え切れないほど夥しかっ

英佛司令官は協議して、 美術工藝品の中から、 最優良品を選んで、ナポレオン三世とヴィクトリヤ女王に献上し、 他

圓明園の研究

は英佛將兵に賣却することに決定した。

(二八九) 四五

れ この決定が英佛の士卒に傳わると、彼等は、 園内に雪崩込んで掠奪に狂奔した。 掠奪心を抑制することができなかつた。忽ち軍紀を忘れて、

瑙、 い 中にも詰め込んだ。 ある兵卒が煤けた佛像の蓮座を壞わして見ると、 揭蓋をあけて床下に這入ると、立派な箱が見つかった。その箱の中にはダイヤモンド、 翡翠を始めとして寶玉類がギッシリ詰っていた。兵卒は此等の寶玉類をできるだけ、 中庭には絹織物、 また銃劍の尖きで佛像を壞わして、寶石を求めたのである。とにかく運搬できないものは粉々に碎 金繡、 銀繡が、 脛を沒するほど、 純金が燦爛と輝いた。 散らかったり、 積まれたりして、 眞珠、 背嚢の中に押し込み、 步行も自由ではなか 紅玉、 碧玉、 珊瑚、 靴下の 9 た。 瑪

小形の美術品は掠奪されたが、大形の陶器、 粉々に碎かれていたし、巨大な象牙が幾本となく、 磁器、 銅器は廓下や地上に委棄されていた。 樹蔭に投げ棄てられていた。 殊に宋明の花 瓶 が 叢 の中

た。 ばかりで 宛囀も耳にすることができない。 室内の喧噪、 俄 カゝ あっ に喧嘩が起って、毆り合いが始った。全く軍紀も軍律もなかった。ただ人間の貪婪、 廊下の靴音、 園内の騒擾は野趣と靜寂を尊ぶ禁宮裏の狂躁樂であった。 森の下道、 松柏の樹蔭、 石橋の袂は西夷の將卒が參々伍々、 今は松籟竹韻も聞えず、 むしろ野獣の貪欲がある 集って聲高 に 話 L 小鳥 7 0)

李の 奪利得の不平等、 は僅少であっ 英佛司令部は士卒に對して、掠奪品を全部提出せよと嚴命した。そして掠奪品を競賣に附した。 底に隱くすことができたのである。 たから、 殊に此の不平等から生ずべき不平不満を恐れていたのである。ところが寶石の如き掠奪品は背囊や行 落札價格も至って低かっ た。 そして英佛司令部は賣上高を均分して、 これを一 無論 同に分配した。 將卒の所持金 掠

愾心は、 けていたものに違 所持品が から英佛士官の軍服が發見され、 英佛將卒が掠奪を行い、さらに破壞に狂奔したことには然るべき原因と事情とがあったのである。 並べてあった。 Ųs やが上にも激化した。 **\**\ ない。 これらの軍服と所持品とは、 恐らく清朝の高官は咸豐帝の天覽に供したのであろう。 彼等は復讐の念に燃え立ったのである。 L かも其の軍 服 には 先日、 血痕が生々しく附 満洲兵の不法行為によって監禁された英佛士官の肌身 いていたからである。 戦友の遺品を見ると、 殊に卓上には英佛 それは宮殿 英佛將士の 土 0 室 0

に、 還附しなければ、英佛軍 ほか宣教師が乾隆帝のために製作した時計、 王朝から送ってきた貴婦人の畫像が並んでいた。その畫像の下部には貴婦人の爵位と姓名とが書き込んであった。その に献送されたゴブラン織で張り廻してあった。その織物にはルイ王家の紋章、 英佛の將卒は圓明園 十月八日、 外國兵は銃劍を揮っ かくて十月八日、 痛憤を禁ずることができなかっ その宏麗な景觀に驚歎したのである。 清國政府は英佛聯合軍が圓明園を占領し、 て、 先日午後、 の本園から、 は北京城に進撃するかも知れなかった。 先づ貴婦人の畵像に突き通した。 通州で満洲兵に捕えられた英國領事パークス た。 屬園の長春園に侵入した。 併し時局は既に急迫を告げ、 しかし彼等に忽ち掠奪を開始した。 地圖、 繪畫、 あまつさえ其の財實を掠奪するに至ったという公報に 玩具、望遠鏡、 それから手あたり次第に破壞して、 彼等は西洋樓を發見して、 それ故、 英佛軍の强硬な要求を斥けて、 排氣機、等、 廟議は捕虜を還附することに決定したのであ 白百合が織り出されいた。 西洋樓の內部にはルイ十五世から乾隆 (Parkes) 等が所せまく陳列されていた。 をはじめ、 種の鄕愁を感ず 兇暴の快を貪った。 其の捕虜を殘らず 九名の捕虜が またフラン る 接する と 同 ス 時

翌九日、 佛 軍 は 圓 明 園 の 門 前から撤退して、 北京城の北邊に駐屯していた英軍と合流した。

圓明園の研究

佛軍に送還された。

(三九一) 四七

に砲撃を加うべきことを恭親王に通達した。

翌十日、 英佛軍の司令官は清國政府に對して、北京、 安定門の明渡を要求し、此の要求を拒むならば、 忽ちに北京城

清國政府は此の要求に屈した。その結果、 北京の城壁には英佛國旗が飜って、 聯合軍は紫禁城に對して、 活殺の權 を

掌握するに至った。

て、 全部併せて英軍側十三名、 英佛側の計算によれば、 清國政府は聯合軍の强硬な要求に屈して、殘餘の捕虜を還送してきた。 果して十月十七日、 痛憤の念が心頭に漲ってきた。 敵軍は捕虜の死體を送ってきた。 佛軍側、 英軍の捕虜は二十六名、 六名に過ぎなかった。 佛軍の捕虜は十三名であった。然るに敵軍の送還してきた捕虜は、 英佛將卒は此れら死體を見ると、 残餘の捕虜は敵の虐待によって非業の死をとげた<br />
に 憐憫の情にかられると同時 違 ひな

生きて歸ってきた捕虜は敵軍の虐待を司令部に上申し、 また戦友にも物語った。

動きができなかっ 苦痛が段々、皮肉に食い込み、忽ち皮膚が擦りきれた。 その道路は凹凸を極めていたし、荷車にはバネが附いていなかったから、 儘で戶外に曝された。 脊中や腰が强く締めつけられ、 捕虜は先づ殘酷な拷問にかけられた。そのあと縛ばられた儘で、荷車に載せられ、北京郊外の圓明園に運ばれたが、 た。 時しも仲秋の候、 しかも敵兵は繩の結び目にシタタカ水をかけたので、結び目が段々、 局部局部がナイフの切先でエグられるかと思うほど痛かった。そして全身、縛ばられた 夜に入ると冷氣が全身に沁み込んできた。 圓明園に到着すると、手足を强く縛ばられていたので、 荷車の振動が直接、 收縮して、 肢體に傳わって、 手足をはじめ もう身 局部の

捕虜は水と食とを求めた。すると汚物を口に押し込まれた。英軍のアンダーソン中尉がインド兵の捕虜に賴んで、 繩

の — 部を嚙み切って貰らおうとした。ところが張番の敵兵に見っかって、 中尉とインド兵も足蹴げにされて、 地上に轉

Z

のは、 そして極度の憔悴と生々しい瘡跡とが報告の内容を實證していた。 の陰慘な姿、その衰え切った口許から、 者が現われてきた。比較的、心身の强力な者は戰友が日を追うて、非業の最期をとげるのを目前にしていたのである。 ポロリと落ちた。そして蛆虫が生々しい瘡跡から湧いてきた。捕虜の中には苦痛の極、 せ衰えた捕虜の肉體に食い込み、手首の骨が現われて、 こういう捕虜の報告が、どれだけ聽く人の敵愾心を激昻させたかは言うまでもない。それ以上、聽く者を噴慨させた その後、 捕虜の姿その者であった。捕虜の顔色は蒼ざめ、頰の肉は痩せ落ち、眼はくぼんで、異様に血走っていた。 捕虜は雁字ガラミに縛ばれた儘、 時には涙ぐんで、時には大粒の涙を流して、虐待の悲痛を訴えたのであった。 またもや荷車に乗せられて明の太陵に近い某村に送られた。 血液の循環が止まった爲に、指の爪先が紫色に變じ、 氣が狂って囈言ばかり繰り返す 細い 遂に爪が 繩 は、 捕虜 廋

りだした。 間もなく清國側から捕虜の死體を送ってきた。この死體を見ると、全軍の敵愾心が益と、激奮して、報復の精神が漲

軍の協賛を求めた。 かし復讐の手段に就いてはまだ意見が纒まらなかった。 英國特派大使エルギン卿(Lord Elgin)と英軍司令官グラント將軍は報復政策を執るべきことに意見の一致を見た。 しかし將軍は賛同しなかった。 英軍側は報復膺懲の件に關して、佛軍司令官モントウバン將

ル」(Sir John Michel) に三千五百の兵を授けて、圓明園の燒毀を命じた。 兹に於いてグラント將軍は單獨で圓明園の燒却を敢行しようと決意し、十月十八日、 部下のサー ジ ン・ミ ッチェ

圓明園の研究

(二九三) 四九

(二九四)

五〇



奇

には、ローマを焼いた暴君ネロの故事は想いだすものも少くはなかった 二日二晩、北京の空は濛々たる黑煙に包まれ、夜に入ると、火熖が眞赤 氣持に沈んだのであった。 に天を焦がし、火の粉が風に飛んで、一種の壯觀であった。 英兵は掠奪しながら、宮殿から宮殿へ、また室から室へと火を放った。 **燒却を命じた英軍の將校は、炎々たる熖を眺めて、却って暗澹たる** 外國軍の中

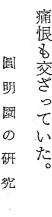
en 1860. Grant and Knolly's, Incidents of China war of 1860. Earl of Elgin) Varin, Expédition de Chine. Walrand, Letters and journal of 文源閣も灰燼に歸したのであった。(Cordier, L'Expédition de Chine た西洋樓も、その噴水も、また天下の珍籍をはじめ「四庫全書」を收藏する かくて東洋第一の離宮、圓明園は忽ち烏有に歸した。 宣教師の築造し

## (M) 結

語

私が北京で買った寫眞帖には、西洋樓のものだったらしい大理石の門扉が雑草の上に倒れ た。 昭和十六年の夏、 ある日、 私は北京に留學していた同僚と一緒に、 私は上海から北京に廻わって、 此の古い都を游歴 車を驅つて、 圓明

園の遺跡を見物に出かけた。





「大水法」南面の廢趾

身長より遙かに長いことが私の目を引いた。

この故跡を前にすると、

當年の盛觀が文籍を通じて、

私の目に浮

伍々、鋤を使って、土を掘りかへしていた。その鋤の柄が、

農夫の

が見えていた。そして炎天の下で、竹の唐人笠を被った農夫が寥々

り茫々たる平野で、青々と麥畑が續いて、處々に楊柳や塊樹の木立

の宮墻の一部が残っているばかりであった。この故跡は見渡すかぎ

ている光景が撮影されていた。

しかし現場に行ってみると、

ただ昔

ものの美しさ」、言い知らぬ詩情が胸に迫ってきて、暫く茫然として を瞑った。 目を見開いた。 樹蔭に佇んでいた。私は目を瞑った。 山河あり」という哀愁が直ぐ意識に登場してきた。 んできたし、 ほ 私は樹蔭に佇んで、暫く行きもやらず、去りもやらなっ んとに低徊、 無量の感慨が胸に迫ってくる。 また歴史的事實が心に甦ってきた。だから「國破れ 去るに忍びずという哀感の中には、 面の畑と農夫の姿が見えるばかりである。 萬感が心に湧いてくる。 同時に「滅びる この圓明園 た。 また目 私は

(三九五) 五. 西洋人が侵入して、その財寶を掠め、

その宮殿を焼き去ったとい

K

で、 圓 明 清國 園 0 政 掠奪と燒毁とが英國 府に莫大な賠償金と捕虜の遺族弔慰金とを要求すれば、 ・議會の問題に取り上げられると、 當時の特派大使エ 財政困難に惱む清國政府は國民に多額の增稅を ル ギンは、 色 々、 事情を釋明した後

府が膺懲の對象であるから、 その結果、 國民は苛斂誅求に泣くであろう。 この政府の最も重寶視する圓明園を燒毀したのである」と辯明した。 しかし英國は中國の國民を相手にしているのではない。 飽くまで清國 政

するに違い

ない。

き所を知っていて、 の釋明が後からつけた理窟であり、 此の急所に 撃を加えて、 詭辯であることは言うを俟たない。それにしても此の特派大使は中國政府の 報復の實を擧げんとしたのである。

泣

この一事に徴しても、圓明園が世界の名園だったことが證明される。

功は赫々たる武勳と見なされていた。現にナポレオン三世の如きは、 われない。 侵 略戦争を行ったのである。 思うに戦争は人類の發狂行爲であるから、 殊に圓明園の掠奪と燒毀とは約一世紀前の史實である。 戦争行為を、 今日の如き平和精神から論議することは必ずしも妥當 當時、 叔父ボナパルトの故智を學んで、 侵略戰爭は君主の家常茶飯事であり、 帝國主義を奉じ その成 とは言

げて平和を悲願する時代では 當時の戰爭は小規模に止り、 原子爆彈もまだ發明されていなか なか 國家總動員の必要もなか 9 た。 5 た。 自然科學、 一言すれば學問 9 たし、 世界戦争にまで發展しなかっ の發達が人類の経滅を豫言し、 た。 まして航空機、 從って世界が 潜 水

變化を來たし、今日の民主々義、 こういう悲願に達する迄には、 百年の歲月が流れた。 平和主義、 文化主義に到達したのである。 との 間、 人類は幾多の苦難を經驗し、 故に百年前に行われた英佛聯合軍のヴアン 人智が進步して、

ダリズムを、 今日の時代精神から批判することは、人智進步の原理を知らざる迷誤と言わなければならない。 まったく

子供の悪戯を大人が向きになって叱りつけるのと同じである。

緯儀、 ラン ツは前大戦に敗れ、 の天文臺を管理していた。 の天文臺を訪れたときには、 の天文堂を設立したとき、 だだけで、 郭守敬の製作したものであるが、現存のものは明の正統年間に原器を模造したものである。そして義和團事件の際、 私は前 ス軍、 黃道經 に申上げた中國旅行の途次、 光緒二八年、 ドイツ軍は戰利品として、 緯儀、 ヴ 天體儀、 エ 清國政府に還附した。 ル 最も由緒ある渾儀、 サ イユ條約によって、分捕った天文器儀を中國に還附した。そして國民政府が 此れらの天文器儀を親しく觀覽することができたのである。 象限儀、 此れらの天文器械を二分して、掠奪した。 璣衡撫辰儀、 南京の天文臺に立ちよった。昔、 簡儀、 然るにドイツ軍は自國に運搬してポツダム園內に飾った。 奎表、 漏刻、 漏刻、 奎表を南京の天文臺に運んだのであった。それ故、 渾儀` 簡儀が飾ってあった。 北京の觀象臺には赤道經緯儀、 しかしフランスは北京の公使館 當時、 此れらの天文器儀 京都天文臺の諸君が此 紀限儀、 南京に近代式 ところがドイ 私が此 地平經 に運ん ば元 フ 0

0) の通り、 爪先が、 私は草原に飾られた渾儀と簡儀を見物した。 龍 どれも一寸ほど、とぎ取られているのである。 は中國皇室の紋章であり、 我が皇室で申せば、 兩儀とも青銅製の巨大な龍が四方から、 菊花の御紋章に相當し、 貴重價値を象徴している。 この器械を捧げていた。 然るに 御承 知

天文臺員に尋ねてみた。 これ は誠に悲しい發見であった。 南京を占領した日本軍の一部が暫く此の天文臺の構內に駐屯していた時、 何者の仕業か、 また何ういう譯で、こういう文化破壞が行われたのか、 兵隊が歸國 私は案内の の土産、

圓明園の研究

大勝占領

0

記念品として、

斯かる暴行を敢えてしたそうである。

(二九七) 五

そう聞いて見ると、

異様の惡臭がプンと私の鼻を掠めた。

殊に漏刻は長らく兵隊の便器に利用されていた。その爲めに我が天文臺員は、 掃除するのに泣かされたそうである。

智な者、 私は此の話を聞いて啞然とした。そして我が皇軍の惡行だっただけに、 無識な軍人には手がつけられない。度しがたいのである。 私は恥かしい氣がしたのである。 とにかく無

英佛聯合軍が約百年前、 我が軍の占領地に於ける破壞、掠奪、暴行に至っては擧げるに遑がない。これも僅に二十年前の出來事である。 圓明園を掠奪したり、燒却したりしたヴァンダリズムを指摘して、その不 正 を 論 難する權 故に

を この う美術殿堂はフランス人の所有でもなければ、中國人の所有でもない。 壞とはこれを愼んだのである。ドイツ軍はパリーの記念物も破壞しなかったし、ヴェルサイュ離宮も兵火をまぬかれた。 なければ、 なのである。 アッチレ神父の言うように、ヴェルサイュ離宮と圓明園離宮とは東西の藝術殿であり、 ·精神が虐殺されたことは、どれだけ美術の職能と發達とを妨害するか解らない。また乾隆帝の如き專制君主の治下で 私は不幸にして持ち合はせていない。 地上にどとめないのである。 往時の盛觀を紙上に復興しようと試みたのである。 漸く文化保存の機運が盛んになり、ドイツ軍がフランスの過半を占領した際にも、第一次大戰に行った殘虐と破 こういう豪華殿は二度と實現しないであらう、そして圓明園は西人の一炬、 殊に圓明園の如き美術殿堂、 私は圓明園に對して、愛惜の情を禁ずることができない。それ故、 またその中に集められた美術品には、藝術家の精神が生きているのである。 實に世界の共有財産であり、 焦土と化し、 兩半球の双璧である。こうい 人類の公共文化財 今は其の痕跡すら 東西の文献を涉猟